〔卒業論文〕

RIFAT　ILGAZ の作品とその背景～詩集『*SINIF*』の検証

Ｔｒ４　田中　幸恵

目次 ―――――――――――――――――――――――――――――― 2

第一章　作者紹介 ―――――――――――――――――――――― 3
（Ⅰ）経歴 ―――――――――――――――――――――― 3
（Ⅱ）作風 ―――――――――――――――――――――― 6

第二章　国家体制と社会状況 ―――――――――――――――― 10

第三章　『*SINIF*』について ―――――――――――――――― 12
（Ⅰ）内容 ―――――――――――――――――――――― 12
（Ⅱ）『*SINIF*』に関する裁判所側の見解 ―――――――― 71
（Ⅲ）『*SINIF*』が果たした役割についての考察 ――――― 78

出典 ―――――――――――――――――――――――― 79
参考文献 ―――――――――――――――――――――― 81

本稿では、現代トルコ文学における詩人及び風刺作家である RIFAT　ILGAZ の作品、主に『*SINIF*』を取り上げ検証し、それに関する論文を参考に、その作品が書かれた背景である近現代トルコ社会における問題と、またそれらに対する文学の影響を検討する。

第一章　作者紹介

Rıfat Ilgaz は１９７１年に出版された『*Hababam Sınıf*』という風刺小説で特に知られる作家であり、トルコではかなりその名は知られている。この作品は後に映画化され、シリーズ物として今も人々の間で親しまれている。だが、彼が生涯社会主義者として国家によってマークされてきたという事実は、あまり知られていないようである。第一章では Rıfat Ilgaz を簡単に紹介するため、（Ⅰ）経歴[(1)]、（Ⅱ）作品、とまとめてみた。

（Ⅰ）経歴

1911 年 3 月 7 日(イスラム暦 1327 年 4 月 24 日)、黒海沿岸の町 Cide（ジデ）で、父 Hüseyin Vehbi、母 Fatma の間に 7 人兄弟の末っ子として生まれる。Cide で役人勤めをしていた父親が、当時彼の上司として来ていた検閲官の名前を息子につけた：Mehmet Rıfat。幼少時は、父親や兄が読んで聞かせるシャーロック・ホームズの探偵ものや、Kerem ile Aslı、Zeycan ile Asuman 等の民話に親しみ、10 歳頃になると、新聞、雑誌、本などを父親に読んで聞かせるのは彼の仕事になった。読み方、話し方はこの時に父親に訂正、教えられた。第六学年次に父親の転勤先 Terme へ移り、そこの小学校を首席で卒業。

1924 年、中学校に通うため Terme から姉のいる Kastamonu へ移る。中等教育を Kastamonu 師範学校で修めた。中学時代はかなりやんちゃな生徒として過ごし、この時のエピソードは、後に『*Hababam Sınıf*』に描かれる。他の授業と違い、国語の授業、特に作文が苦手だったというのは面白い事実である。恩師 Zeki Ömer の影響でこれも克服し、1926 年、詩作を始める。Rıza Tevfik の“ *Kabr-ı Fikret'i Ziyaret* ”という詩に影響を受け、次の詩を書いた。[(2)]：

Mezarını kaplayan bu çiçekler ne solgun!..彼の人の墓を覆うこの花々のなんと青白いことか！..

Üstündeki benekler gözlerinden de dolgun.　表面の斑点は彼の人の目からも溢れている。

父親の友人である *Nazikter* 誌の社長に見出だされ、1927 年には *Açık Söz*、*Nazikter*、*Güzel İnebolu*、*Güzel Tosya* 等の新聞に詩を投稿するようになる。最初に掲載された詩は“ *Sevgilimin Mezarında*（恋人の墓にて）”というタイトルで、1927 年 7 月 27 日付けの *Nazikter* 誌に載った。1928 年には風刺的なものに傾倒し始め、最初の風刺作品を *Çalçene* という風刺雑誌に本名で掲載。学校では、国語以外の科目に全く無関心であることに校長が怒り、彼の詩の載っている新聞を父親に送り付けるなどしたが、彼の父は彼にとって良き理解者であったようで、戒めるどころか彼に本や雑誌を買うためのお金まで送ったというエピソードが残っている。[(3)]

1928 年、Terme で父が亡くなったとの知らせが届く。父親の死は経済的に大きなダメージとなり、彼は教員養成所に行かざるを得なくなる。1929 年になるとそれまでに書いた詩を好まなくなる。これについては（Ⅱ）で詳しく述べることとする。Gazipaşa 小学校での教育実習の後、Gerede Misak-ı Milli 小学校で教鞭をとる。1932 年、彼の勤める小学校の教員 Nuriye と結婚、同年女児誕生。Gönül

と名づける。1933 年 Gerede から Akçakoca へ転勤。同年兵役に出る。これが理由で妻と離婚を余儀なくされる。期間中、イラン国王がアンカラを訪れるため、アンカラへ移動、ここでその後長く交友関係を持つことになる Sabahattin Ali と知り合う。14 ヶ月の兵役の後、Akçakoca の元いた学校に戻る。1934 年、Ilgaz の姓を持つ。姓の無いものには給料が支払われないとの噂のため、Tosya にいる兄との関係は保てなくなる。それまでは戸籍上「Paşacıoğlu diğer mahdumu Mehmet Rıfat（調教馬商人のもう一人の息子 Mehmet Rıfat）」となっていた。Halkevi（人民の家）にて読み書きを教える。1935 年、Gümüşova（現在の Pamukova）の Halkevi に校長として転勤。

1936 年、Kastamonu にいる兄のところで Gazi Terbiye Enstitüsü Türkçe Bölüm（ガーズィ教育学院トルコ語科）の入学試験を受け、合格する。入学がきっかけで、*Varlık*、*Çığır* 各誌と近い関係を持つようになり、そこに詩を発表し始める。二番目の妻となる Rikkat ともこの学校で知り合う。1937 年、学友であった Rüştü Şardağ の仲介で彼の詩のいくつかが Yaşar Nabi のもとに送られ、その内ひとつの四行詩が Nasuhi Baydar の手に渡り、『*Ulus'un Sanat Dergisi*（国家の芸術誌）』の表紙を飾った。1938 年、*Varlık* 誌に載った“ Garip（奇妙な）”詩が友人達との話題の中心となる。Garip 詩については、やはり（II）で詳しく述べることにする。

1938 年に Gazi Terbiye Enstitüsü Türkçe Bölüm を卒業、Adapazar でトルコ語教師として勤める。1939 年 2 月、Rikkat と結婚。*Oluş* 誌に詩を寄稿し始める。1939 年 4 月 1 日、以前結核で（Ilgaz の持病であったらしく、これが元で入院することが多かった）入院したことのある İstanbul の Yakacık Sanatoryumu で Nâzım Hikmet と出会い、親交を深める。Adapazar で 6 ヶ月教えた後 İstanbul へ転勤となり、Gedikpaşa に移り住む。1940 年 3 月 2 日、長男 Aydın 誕生。この年には *Varlık*、*Çığır*、*Oluş*、*Güneş*、*Yücel*、*Ulus'un Sanat Eki*、*Hamle*、*Yeni İnsanlık* に詩を発表している。また同年、Edebiyat Fakültesi Felsefe Bölümü（イスタンブル大学文学部哲学科）に入学。多くの知識人達と知り合い、Rustuk Köftesi, Marmara Kahvesi, Nusaz Pastanesi, Küllük Kahvesi, Lambo'nun meyhanesi 等、当時社会主義者達の社交場となっていた場所で作品の品評や議論を交わすなどしていた。(4) Orhan Veli とも Küllük Kahvesi で初めて顔を合わせる。1942 年 9 月 9 日、“ *Yürüyüş* ”誌の 7 号から彼の詩が載るようになり、16 号で編集長の役を引き継いだ。獄中の Nâzım Hikmet や Raşit Kemal から手紙の形で届けられた作品を İbrahim Sabri、Orhan Kemal の名で掲載するなどした。“ *Yürüyüş* ”誌には、詩集 *SINIF* の内、*Çocuklarım* が 14 号に、*Alişim* と *Sınıf* が 16 号、*Sayfiye* が最終号となった 18 号に掲載された。この当時は月給すべて合わせて 88 リラ 81 クルシュしかなく、パンひとつ 1 リラする時代にはかなり生活も苦しかったようである。

1943 年、最初の詩集“ *Yarenlik* ”を Sebat 出版社に勤務する編集者 Avadis Aleksanyan の協力で自費出版する。第二次世界大戦は、40 年代の社会主義者、現実主義者の存在に大きな影響を及ぼしたらしく、彼の作品もこの困難な時代を具体的に反映するものとなった。(5) 7 月 5 日、*Yürüyüş* 誌が内務省の命令で発禁処分を受ける。同年 11 月、母と兄の住む Tosya で大きな地震が起こり、Rıfat も自らの体調不良も省みず Tosya に向かった。ここで目にしたものを彼は *Vakit Gazetesi* にてつづり、同時に地震を元にした詩、*SINIF* の最後の作品“ *Tosya Zelzelesi* ”も掲載された。

1944 年 1 月、Samsun 出身の Tahsin の援助もあって、2 冊目の詩集 *SINIF* が Sebat 出版社から出版

される。しかし 2 月には内務省の決定により *SINIF* はすべて本屋から回収されることとなり、店頭に並んだのはほんの 25 日間だけであった。3 月 9 日、家に帰ろうとすると自宅前で警官が待ち伏せしており、友人の Nahit Eren の家に避難、その後暫くそこに潜伏する。医師に指示された静養期間は終了したが、そのような状況で仕事に戻るわけにもいかず、必然的に彼は辞職したと見なされた。5 月 24 日、第二次世界大戦の戦況の変化による動揺を機に、自首を決意する。街角のいたるところに“自首するために出てきた。自分を探し回る人に分かりやすいよう”といった主旨の張り紙をして回り、しかし逮捕されるより前に自分から第一分隊に出頭した。8 月 10 日、裁判にかけられ、トルコ刑法 142 条に反した罪で、6 ヶ月間の禁固刑が言い渡される。これは当時この条項の最も重い刑であった。

その後 Sultanahmet 刑務所に移され、11 月 24 日に出所した時には、教職も哲学科での学籍も失っていた。出所と同時に Heybeliada Sanatoryumu に入院。退院後も 1945 年 9 月 4 日には再入院、治療を受ける一方で、詩のほか簡潔な文章等書き始める。しかしこの状況下でも、部屋から勝手に逃げ出さないよう鎖でつながれるなどかなり制限された不便な生活を強いられていた。10 月には Aziz Nesin が出版する予定の“*Cumartesi*”に掲載するため、“サナトリウムからの手紙”という題で原稿の準備を始める。この頃体調を壊しやすく入退院を繰り返している。1946 年 2 月 13 日、“*Cumartesi*”に“サナトリウムからの手紙”の連載が開始、5 リラを給料として受け取る。1944 年 3 月以来の給料である。5 月 14 日、トルコ社会主義者党が結成され、Aziz Nesin と共に歩いて出入りするようになり、この頃 *Markopaşa* というタイトルの雑誌を作ることを計画し始める。トルコ社会主義者党の出版物として *Gerçek* という新聞を Esat Adil、Sabahattin Ali、Aziz Nesin らと出版し、19 号まで数えるが、イスタンブル軍法司令により発禁処分とされる。8 月、Esat Adil によってトルコ社会主義者党に入党させられるが、9 月には教職を取り戻すため脱退した。

1946 年 11 月 25 日、 *Markopaşa* 第一号が出版された。この時代の反体制的大衆新聞としては最高の売上部数を誇るようになり、一年間で 6 万部にも達した。1946 年 10 月には Boğazlıyan 中学校に国語教師として派遣されていたが、一年後には教師をやめて新聞記者に転身した。（1948 年）*Markopaşa*、*Malumpaşa*（*Markopaşa* が 19 号に掲載の“*Dediğin*”という詩のため起訴され、一時的に発禁となった間その内容を受け継いで出版、5 号で打切り）、*Merhumpaşa*（1947．Sabahattin Ali が出版）各誌の編集部で勤めた。1948 年、三冊目の詩集 *Yaşadıkça* が出版される。1952 年には *Adembaba* という風刺雑誌を自ら出版。彼が手がけた風刺作品や 1953 年に出版された *Devam* という詩集が糾弾され、5 年 5 ヶ月 25 日の懲役となる。1955 年以降主に風刺小説で活躍するようになり、1956 年から風刺雑誌 *Dolmuş* 誌に寄稿を始める。1956 年から風刺小説も手がけ始め、同年 8 月には Hababam Sınıf が掲載され、映画、芝居などに取り上げられるような大ヒットとなる。その後も *Dolmuş*、*Taş*、*Karikatür*、*Şaka*、*Külah* 各誌、*YeniGazete* 新聞に寄稿するなど活躍し、1993 年 7 月 7 日他界。

（II）作風

（I）で述べたように、Ilgaz は中学校在学中に詩作を始める。この当時彼が書いていた詩は主に抒情詩が中心だった。初めて新聞に掲載された詩のタイトルは、「私の恋人の墓で」というもので、これは Rıza Tevfik に影響されて書いたものである。しかしこれについて Ilgaz は、「私には恋人もいなかったし死んでもいなかった。文学作品において当時私が好んでいた詩を模倣してこういった詩を書く必要を感じたらしい。つまり Rıza Tevfik が Tevfik Fikret のために書いた『Fikret の墓を訪ねて』という詩の“ Fikret ”の部分が恋人に代わっただけだった。」(6)と言っている。1929 年、それまで書いていた詩を好まなくなり、社会主義的内容を追い始める。「外から見つけるべきか、それとも自分の人生から取り出すべきなのか？（…）社会主義的意識が自分には必要だった。これに芸術文化、熟達した言語能力、新しい形の能力も加えられねばならなかった。この必要性を感じていた。特に Nâzım Hikmet の『835 行』を読んでからだ…。残念ながら、最終学年に上がった年、私が追求していた詩が、書いていた詩がそういったものでなかったことを、感情の方向においてあまりに個人的で、個人的であるくらい私的な詩に傾倒していたということを理解するようになった。」(7)　この当時の作品は後に Ilgaz が書くものとは趣が大きく異なっている。この頃の作品は個人的感情に近く、より伝統的であるとしている。この当時彼が好んで用いた言葉が、「銀の枝」「絶望の日々」「青い地平」「謎めいた光」「あいまいな記憶」などのようなものであったことを見てもこの傾向は見て取れると、Şükram Kurdakul は言っている。(8)

彼の初期の創作を後に出版された詩集で見ることはできない。彼はこの頃の作風に自分では良い評価を与えていない。1940 年代に彼は、伝統的な音節詩の形式や内容を引き継いだ作風を変え始めたが、それまでの作品に関して 1948 年 Başdan Dergisi で次のように述べている。「…（1940 年ごろまでに）おそらく三冊分になるであろう量の詩があった。これらをいつ本にまとめたとしてもこれらには人工的な側面、自分達とは異なった人々や自分達を認めない人々の側面があったように今感じている。これらの詩はむしろ怠け者階級の、生活苦とは縁の無い人々の趣向に合っていた。我々とは異なる人々の趣向に無意識に私が行った貢献の結果を、遅まきながら私は理解した。もはや誰のために、また何のために詩を書くのか、私には分かっていた。…」(9)　しかし、いかに Ilgaz 自身が認めないとしても、やはりこの時期の作品もまた後の作品の基盤になっていることは否めない。

Ilgaz が詩の形式を変え始めたのは第二次世界大戦の影響が濃い 1940 年代である。この頃はトルコ全体で、Olhan Veli や Nâzım Hikmet のような社会主義思想の詩が高揚していた。彼は編集長を勤めた Yürüyüş 誌の序文で次のように言っている。「絵画や音楽の芸術においてそうであるように文学の構造にも影響した宗教的概念は、その地位を次第にもっと他の不安へ譲った。人間と社会という言葉で説明できるこの不安がこの二世紀の間に文学を占めるようになり、特に小説というジャンルにおいてそれはよく見て取れる。（…）詩人は自分自身を説明することと主観的に外界を扱うことでは彼らが発表した作品に社会的価値は得られない。芸術家は何よりもまずその環境や社会を理解できるような進んだ思考システムを持っていなければならない。このレベルに到達している芸術家のみが期待されるものを自ら生み出すことができるのだ。」(10)

Ilgaz の作風の変化は、Şükram Kurdakul によって次のように説明されている。；「個人的感情によ

り近いこの作風から、飛躍ではなく発展的な結論を Ilgaz は導き出した。まず音節の制限を捨て、韻に基づいた四行詩の構成で形式ばった制限を越える。そして異なったテーマと具体的な状況を見出そうと努めている。」[11]　また、「それまでの自由詩における対句、反復などの保証から解放された、決り文句のあまり無いある“詩言葉”で書かれ」ていることを Pertev Naili Boratav も言っている。[12]

Ilgaz の詩作の変化に影響を与えたもうひとつの要因として、（Ｉ）でも簡単に触れた Garip 詩がある。これは Orhan Veli, Melih Cevdet, Oktay Rıfat らに代表される、トルコ詩において比較的新しい口語体自由詩の風潮である。1938 年 Garip 詩が Varlık 誌上で初めて文壇に登場した時、Gazi Terbiye Enstitüsü の学生であった Ilgaz は、これを友人達に紹介し、この詩人たちがトルコ詩にもたらした斬新さについて説明した。ステレオタイプの教授は音節を無視したこれらの詩を好まなかった[13]が、それだけに Ilgaz がこの形式に着眼したことは評価されるべきである。Ilgaz もこの風潮にならい、新たな境地に至る。口語を用い、意味的な芸術に興味を示すことなくできる限り平易な文体を心がけた。[14]

ユーモアもしばしば彼が用いた方法である。彼のユーモアセンスは特に注目に値する。それはただ笑わせるだけではない、ブラックユーモアと呼んで差し支えないものであると思われる。ドラマチックな事柄を淡々と描き出し、物質的・精神的苦痛を和らげるようにしている。「腕を農具の皮ベルトに巻き込まれ片輪になってしまった Ali に次のように呼びかけている。“嘆くな Ali よ、鋤が使えなくても／地主の家畜を追うことはできる／フェルトの外套の下にあるかけた右腕を誰が見よう／お前は食わせてもらえる召使にもなれる／お前のサズは壁にかけておけ／バチも一緒に放っておけ／右側には枕をおいて／左側には恋人を／だが娘達も壁のサズのように／両手のある男がいいらしい」[15]

詩集 *SINIF* の中にも、彼のユーモアセンスの光る作品が多々ある。*HÜRSÜN！*を例に挙げてみよう。[16]

（…）

私は知らない、何故お前が慣れっこにならなかったのか　その見廻り人達に、
道理に合ってないか？自分の管轄街区の外へ
彼らがお前を追放したとて？
彼らでもお前に干渉しなければ
お前は忘れるだろう　自分が一体何であるのかを。
今日お前に価値が無くても
そのときも来よう、
お前の名は人の数に登録されねばならない、
路銀はまもなく出るだろう
その年になればお前も兵士になるのだから！（…）

行き詰まった絶望感を笑いに転じ、日常的事柄としてあらわす手腕は見事である。もうひとつ *SÜNNET DÜĞÜNÜ* も見てみよう。[17]

(…)

実際のところ 楽しみなしでは我々はやってゆけない
街には娯楽が必要ではないか
ウズン アフメットの娘が
近日中にもう一度婚約をしなければ
八月には割礼祝いをやろう
老いも若いも楽しもう。
我々の使い古されたカーペットに迷惑がられるだけだ
何かそそうがあったとしても...（…）

また *NE DİYEBİLİRSİN* では[18]；

（…）

新しい新聞を読みたくてしかたがないのだろう、
新聞は老人達の手の中だ...
時間になってラジオがかかる、
聞け　聞けるものなら！
男客たちがやってきた　飲んだ帰りに、
一言でその番組を消してしまい
レコードでウルファの音楽をかける、
お前に何が言える、
力は金と結びつくのだ！
ごたごたに首を突っ込むような奴じゃないだろう
お前は早くに家路につく；
また六時には起きねばならない男は
何の用があったのだ、コーヒー屋で！

金の無い男が気晴らしに入ったコーヒー屋で、結局何もできずにすごすごと帰宅する姿を、笑いつつも愛情こもった目で見つめている。不安、絶望感は、現実としてはもう笑うしかない、ということをよく知っていて、そういった状況下の人々を見下ろして笑うのではなく、同じ視点に立って共に笑っている。

社会風刺的な詩に傾倒するようになってからの作品を、詩集『*Yarenlik*』ではじめて読者に示した。ここでは低所得者層の日々の生活の情景が描き出されている。『*Edirnekapı*』を一例に挙げてみよう。[19]；

Kırklareli では乗組員だった
Atikali で飛び跳ねていた若い男は
Çatalhan でスリッパ屋をしていた　以前
その親方を怒らせると
今度は煙突掃除夫になった

朝までやってるコーヒー屋で
－Necmi の茶を我々はよく飲んだものだ－
今はぼんやりとうろついているとしても
Beykoz の工場に入るだろうさ
道を見つけさえすれば

以前の詩に見られた言葉の上での流麗な表現は消え、より平易な文体になっていることがわかる。また内容も、定職につけないひとりの男の、さしあたって誰も見向きもしないような人生についての叙述と、それまでの作品からかなり変わったことが伺える。Ilgaz の詩の題材について Pertev Naili Boratav は次のように言っている。「仰々しいタイトルや内容、重要な出来事や人を陳列する形で印象付けようとする悪い伝統から脱却した」[20]「個性を消し去る形で個性の持ち主になったように見うけられる。詩の題材を探すとき、遠くへ行ったり高いところへ登ったりする必要性を彼は感じていない。自分に最も近い環境や最もよく知っている人々や物事で十分としている。あらゆる出来事、瑣末な事柄、最も重要でないことですら詩の題材になりうるのだ。十分だからこそ、これを説明する言葉を我々は見つけられるし、純粋な人間感情を我々の狭い感情の枠組みから取り出し、全ての人々に普遍化させることの面白さを説明できるのである。」[21]

Ilgaz が Yarenlik 以降扱った題材は、主に社会底辺部、つまりトルコ社会における大多数の人々の日常である。日常の中のドラマから目をそらすことなくその苦しみをユーモアを交えて描き、その結果社会の矛盾を浮き彫りにする、彼独自のスタイルを生み出したのである。

第二章　国家体制と社会状況

社会主義者、リアリストである詩人 Ilgaz を、起訴・投獄にまで追い込んだ当時のトルコ社会とはどのようなものであったかを、政治・経済的側面から追ってみようと思う。ただ、物事が起こるにはその以前から積み重なる数々の出来事や環境の変化の影響が大きいことは無視できない。Ilgaz が社会主義的風刺詩に傾倒するに至った経緯、その作品を是としない体制が形作られた歴史を考えるためにも、*SINIF* に関わる一連の事件の時代から少々遡って見ていくことにしたい。

Ilgaz が 10 代の頃、1920 年代、つまりトルコ共和国建国当初は、オスマン朝時代の半植民地的経済が未だ根強く残っていた。金融組織、基幹起業は外国資本に一手に握られ、生活必需品も多くは海外からの輸入に頼らざるを得ないとう脆弱な経済を抱え込んでいた。人民は 1911 年以来長く続いた戦乱で疲弊し、経済的に成功するための手段も無ければ、「経済的成功」という目的すら持たない状況だった。1923 年 2 月 17 日、脱植民地化、民族資本の育成を目的としたイズミル経済会議が開かれる。この会議では商人、職人、農民、労働者という 4 つの層の代表者からなる委員会を設置し、それぞれが要求事項をまとめ、それを全体会議で承認するという民主的な形をとった。しかし、全体会議での権力を西アナトリアの民族資本家、資本家的地主層が掌握し、労働者委員会の要求事項、即ち賃金の値上げや労働環境改善などは否決される。農民層からなる委員会も、上層農民が席を占めていて、要求事項は農村のいわゆる「近代化」であった。農民委員会とは言ってもそれは小農民不在のもので、その要求は農民全体の意向とは言えず、よってこの経済会議は真に民主的なものとは言えなかった。(22)

1930 年代になると、エタティスム（国家資本主義による経済改革）の推進で、トルコの民族資本は少しずつ強化されるようになる。世界恐慌のあおりで打撃を被りはしたが、貿易収支は黒字に転換した。国家が経済的に安定してくると、人々の目は社会・文化に向けられるようになる。この時期にトルコ社会は「近代」国家の装いを呈し始める。ひとつには女性解放で、女性が社会の第一線で働くことが認められるようになったことが挙げられる。そしてもうひとつ、Halkevleri（人民の家）という施設が 1932 年に設立され、地方への文化活動の浸透が図られた。第一章（Ⅰ）で述べたように、Ilgaz も 1934 年 Akçakoca の Halkevi で人民の家スポーツチームのチーフに選ばれたり、読み書きを教えるようになり、また女性解放という面からも、女性のための読み書きクラスで授業したりもしていた。教室は女性の生徒で一杯だったという。(23)　1935 年には Gümüşova の Halkevi の校長に就任している。しかしこの「近代化」も、こういった啓蒙活動が都市に限定されて行われていたこと、また当時トルコ政府を牛耳っていた共和人民党よりの人々に奉仕するケースが多かったことより、農民には浸透しない局部的な「近代化」であったことは否めない。『この時期の改革は国民の大多数を占める農民には無縁なものであり、かえって都市と農村との格差を助長したにすぎなかった。』(24)。Ilgaz のこの活動への参加も、言ってみれば少数知識層の自己満足的なもので、だからこそ前に述べたように彼はこの頃も含めた初期の作品を、『無意識に生きていた頃の作品』として詩集に入れなかったのかもしれない。(25)

第二次世界大戦期に入ると、トルコは中立を貫くが常時臨戦体制を整えておかねばならず、軍事

力増大が強いられる。軍事予算は通常の２倍となり経済は悪化するが、同時に輸入減少のおかげで外国製品が市場から激減、食料品など生活必需品の価格が急騰したため、戦争成金や、1930 年代のエタティスムが育成してきた民族資本家、企業的地主など一部に資本の蓄積が集中するようになる。文化的側面では、1940 年農村師範学校が設立される。これは『農民の子供達を寄宿制の師範学校にいれて、5 年間の教育を受けさせたのち、それぞれの農村にもどして教師をさせることを目的とする』運動で、『実践教育を旨とし、農村生活に必要な技術を習得させ、村の生活改善・生産過程の改良・農産物の市場化の方法を学ばせて、村社会の新しいリーダーを養成することを課題としていた。』[26]。Halkevleri のような上層部からの改革と違い、初めての大衆的近代化運動であった。しかしこれは、すぐに農村を牛耳る宗教指導者や地主、保守的農民層の反対に合い、またトゥラン主義者達からは“ コミュニズム運動 ”と非難され、1954 年には完全廃止に至る。ここで、トゥラン主義者というのは、パン・トルコ主義を信奉する人々のことで、1942 年以降急速に影響力を拡大してきた勢力である。全てのトルコ系諸民族を一民族と見なし、スターリンのソ連の圧政下に置かれた他のトルコ系住民は、本来自分達とひとつの国家を作るべき人々であるという主張より、必然的にアンチ･コミュニズムの立場をとるという訳である。体制側としてはソ連をあまり刺激しないためにも、こういった極右的運動は取り締まったが、同時に資本主義を築き上げている社会としてコミュニズムに対する警戒心も強く、両極はともに弾圧の対象であった。[27]

戦後アメリカの傘下に入ったトルコは、ソ連との国交が悪化し、1946 年事実上の複数政党制に移行してからは、1947 年のトルーマン･ドクトリンの恩恵も有り民間企業を奨励するなどして、資本主義をひた走るようになる。

テーマの *SINIF* に関わる時代はこれくらいまでである。体制側が絶対的な国家権力を維持しなければ国力強化が成り立ち得なかった時代であれば、その権力に対して異議を唱える者が認容されるはずもないのは当然のことである。だが、国家資本主義による目覚しい経済発展の裏で、農業生産構造の制約、「東西問題」の出現、地主･富農の利益追求のしわ寄せなど、新たな問題を抱えるようになったこの社会は、表向きの近代化の陰で、学校にも行けずに働く子供のような社会的弱者をも生み出してしまったことも事実である。ここから目をそらすことのなかった Ilgaz は実際、リアリスト的詩人の名に値する。

第三章『*SINIF*』について

『*SINIF*』が出版されたのは１９４４年５月であるが、第一章で述べた通り、出版後まもなく ILGAZ は「コミュニズムのプロパガンダをしている」として逮捕され、裁判にかけられることとなった。裁判の結果、当時の刑法で一番重い刑の６ヶ月の懲役が言い渡された。これより後 ILGAZ はブラックリストに載せられ、体制側より常にマークされる人物となった。まず（Ⅰ）で、この詩集の全１９編の作品を紹介し、（Ⅱ）では、裁判所及び検察側の主張を挙げる。最後に（Ⅲ）で、この作品がトルコ社会にどのように影響したかを自分なりに検討したいと思う。なお、（Ⅰ）の対訳はトルコ人の教官や留学生から多大な協力をいただいて、私が訳したものである。表現の拙さはいたるところに見られると思うが、さしあたっては内容を参照するに十分な程度には訳したつもりである。(28)

（Ⅰ）内容

≪*ÇOCUKLARIM*≫

Yoklama defterinden öğrenmedim sizi,
benim haylaz çocuklarım!
Sınıfın en devamsızını
bir sinema dönüşü tanıdım,
koltuğunda satılmamış gazeteler…

Dumanlı bir salonda
kendime göre karşılarken akşamı,
nane şekeri uzattı en tembeliniz…
Götürmek istedi küfesinde
elimdeki ıspanak demetini
en dalgını sınıfın!

İsterken adam olmanızı
çoğunuz semtine uğramaz oldu mektebin
palto,ayakkabı yüzünden.

Kimimiz limon satar Balıkpazarında
kiminiz Tahtakalede çaycılık eder；
biz inceleye duralım aç tavuk hesabı,
tereyağındaki vitamini
ve kaloriisini taze yumurtanın!

Karşılıklı neler öğrenmedik sınıfıta,
çevresini ölçtük dünyanın,
hesapladık yıldızların uzaklığını,
Orta Asya'dan konuştuk lâf kıtlığında.

Neler düşünmedik beraberce
burnumuzun dibindekini görmeden
bulutlara mı karışmadık.
" Hazan rüzgârı " nda dökülmüş
" hasta yapraklar " a mı üzülmedik.
Serçelere mi acımadık, kış günlerinde
kendimizi unutarak!

≪私の子供たち≫
出席簿では分からなかった、お前達のことを、
私の怠け者の子供たちよ！
教室の最たる怠け者を
ある映画館の出口で知った
脇に挟まれたまま売れなかった新聞…

煙ったサロンで
私なりに夕方を迎えるとき
ミントの飴玉を売っていた、お前達の中で一番の怠け者…
背負い籠で運びたがった
私の手にあるほうれん草の束を
教室では最も上の空の子は！

お前達が一人前になることを望んでいるのに
そのほとんどは学校の方へは向かわなかった
オーバーコートや靴のせいで

中にはバルックパザルでレモンを売る者もある
中にはタフタカレで茶売りをする者もある
我々は学んでいる　腹を空かせた鶏の勘定
新鮮なバターに含まれるビタミンを
そして新鮮な卵のカロリーを！

共に教室で学ばなかったことなどあるだろうか
世界の円周を我々は測ったし
計算もした　星ぼしの距離を
中央アジアについて話したものだ、言葉足らずながら

一緒に考えなかったことなどあるだろうか
我々の鼻の先にいるものを見ずに
雲の中に飛び込んだのだ
‘ 秋の風 ’ の中で枯れ落ちた
‘ しおれた葉 ’ を我々は惜しんだ
すずめ達に同情した、冬の日々
自分たちの問題はさておいて！

≪*REMZİ*≫
Ne sorayım sana,
derste kulak dolgunluğu
hatırında kalanları mı söylersin,
uyku sersemliği
şöyle bir göz gezdirdiğin kitaptan
aklına girenleri mi?

Çalışmadın istediğim gibi,
ya komşulara su taşıdın çeyreğe,
ya bekâr çamaşırları yıkarken annen
beşiğini salladın kardeşinin…
Belki gaz yoktu bu gecelik
şişesi çatlamıştı belki de lâmbanın.
Şu halde cevapsız kalacak sorduklarım,
zararı yok,
vakti gelince senden öğreneceğim
makarna, un dağıtıldığını,
Bulgaryadan gelen kömür motorlarının
yanaştığını Kumkapıya.
Etin iki lirayı aştığı günlerde
kulağına kar suyu kaçan toriklerin

karaya vurduğunu.

İşimize yaramasa da
kaça sürüldüğünü kahvenin el altından
yine sen bilirsin bu sınıfta.
Yaz ortasında bulursun
hasta için olduktan sonra
limonun en sulusunu.
Mahalle kırılırken uyuzdan
kükürdü sen taşırsın
Mısır çarşısından hastalara.
Ararsın kursağına girmese de
folluğa yeni düşmüş yumurtayı
cılız çocuklar için.

Senin omuzlarındadır her işi mahallenin,
en merhametlisini verem doktorunun
dişçilerin en ucuzunu
sen sağlık verirsin komşulara.

Bildiklerin de vardır fazladan
çiviye, kalaya dair…
Biraz daha kurcalarsam
dökersin iç yüzünü Nalburların,

Her işe aklı yatan çocuğum,
kalktığın zaman tahtaya
yüzünün kızarması neden?
Ayağında sağlamca bir pabuç
sırtında bir ceket yok diye mi?
Ne var bunda sıkılacak,
utanmak bize düşer çocuğum!
Eğer çalışmadığın içinse,
bildiklerin sana yeter,
notun eskiden verilmiş,
bilmediğin şahıs zamirleri olsun!

≪レムズィ≫
何を聞けるだろう　お前に
授業で何となく耳に付いて
記憶にぼんやり残ったことを答えるのだろうか
眠いばかりに
そうやってお前が目で追うだけの本から
お前の頭に入ってくるものを？

お前は努力できなかった　私の望んだようには、
２５クルシュで隣人に水を運んでやったか、
でなければお前の母親が独身者の洗濯物を洗う時
お前は弟の揺りかごを揺らしてやった…
たぶん今夜分のガスはなかっただろう
また恐らくランプのビンも割れてしまっているのだろう
そんな状態で私の聞くことに返事は期待できまい、
まあ　よい、大したことじゃない、
時が来れば　私はお前から学ぶのだろう
スパゲッティや小麦粉が配給されたことを、
ブルガリアから石炭を売りにくる船が
クムカプにやって来たのを。
肉が２リラをこえる日々
病気になったカツオが
岸辺に打ち上げられるのを。

我々とはまったく無関係でも
闇売りのコーヒーがいくらになるかを
やはりこの教室で　お前は知っているのだ。
夏真っ盛り　お前は見つけるだろう
病人がいたとなれば
レモンの最も水気のあるものを。
街区が　らい病でいっぱいになれば
硫黄をお前は持っていくだろう
エジプシャンバザールから病人たちのために
探すだろう　お前自身の喉を通るわけでもないに
鳥の巣に新しく産み落とされた卵を

やせこけた子供たちのために。

街区のあらゆる仕事はお前の肩に乗っている、
結核を診る医者で最も慈悲深い者を
歯医者の最も安いのを
お前は近所の者たちに勧める。

お前が知っていることはもっとあるに違いない
釘やブリキについて…
もう少し私が首を突っ込もうなら
お前は暴露するだろう　金物うりの内情を、

あらゆることに精通している私の子よ、
黒板の前にお前が立つとき
その顔が赤くなるのは何故だ？
お前の足に丈夫な靴が、
お前の背に上着が無いからか？
何のためにこれを恥じる、
我々が恥じ入るべきなんだ　わが子よ！
お前が努力しないからといったって
お前の知っていることでお前には事足りる
既に及第点は与えられた、
お前が知らなかった人称代名詞などどうでもいいんだ！

≪*SINIF*≫
Bizim kadar Feyzi Hoca da
yaka silkerdi Kadıoğlu’ndan；
kime çekmiş derdi, bu Yezit…
Öyle ya, iyi adamdı babası,
kapısı açıktı otuz Ramazan
memleketin ileri gelenlerine.

Aliklan, başkesendi, sınıfta,
lâfı ağzımıza tıkar
zorla dinletirdi, ineklerinin
kaçar kova süt verdiğini,

motorlarının Gülcemal'i
nasıl geçtiğini, çaltıburnunda.
Ve sen, gözünü budaktan esirgemiyen
Halil'im,
kıyı kıyı kaçardın sohbetimizden.
Yemek paydosunda bizden saklı
bir baş soğanı yoldaş ederdin
saçta pişmiş mısır ekmeğine.

Her salı
sergi açardın cami önünde,
tuz satar, yumurta toplardın
Gümrükçünün hesabına.

Biz aynı gün hesaplardık hocamızla
şu kadar bin liranın ne getirdiğini,
şu kadar senede.
Ertesi gün karşımızda kıvırırdın
yarım ekmekle, çarşı helvasını,

Benim yumruğuna sıkı Halil'im
çekerdin sineye Kadıoğlu'nun
yakası açılmadık küfürlerini；
tuhaf gelirdi uysallığın,
nerden bilecektim onların çiftliğinde
babanın yanaşma olduğunu.

≪教室≫
我々と同じくらいフェイジ先生も
うんざりしている　カドゥオウルには；
誰に似た？－と言った－この害虫は…
いやいや、彼の父親は立派な人だった
寛大にもてなした　いつだって
国の重要な人々を

アリクラン、彼はゴロツキだった、教室で

くだらないお喋りを我々の口に押し込んで
無理やり聞かせた　やれ自分とこの雌牛が
逃げ回るバケツにミルクをやるだの、
やれ車がギュルジェマルを
どんな風に過ぎていったかだのと
そしてお前、勇敢な
私のハリルは
我々のそんな会話から遠く離れて
昼飯時には隠れるように
玉ねぎ一つを道連れに
鉄板で焼いたとうもろこしのパンと一緒に食べていた。

毎週火曜
お前は店を開くのだった　モスクの前で、
塩を売り、卵を集めた
徴税人のために。

我々はそんな時計算した　先生と一緒に
それっぽっちの数千リラで何ができるかを、
たったそれっぽっち　年に。
次の日我々の前で　お前は巻いた
パン半分で、下町のヘルヴァを、

こぶしを握り締める私のハリル
お前はあえて胸にしまい込んだ　カドゥオウルの
どうしようもない悪言を；
奇妙なことだった　その従順さは、
私には知る由も無かったのだ　彼らの農園で
彼の父親が雇われていたとは。

≪*HÜRSÜN!*≫
Karışanın yok, görüşenin yok,
ne hocadan azar işitirsin
çalışmadığın için,
ne başına kakanlar bulunur
yediğin ekmeği.

Hangi işe soktunsa burnunu
dikiş tutturamadın,
ne zormuş ekmek parası çıkarmak!
Macuncunun defini çaldın gündelikle
çabuk usandırdılar,
mani düzdün keten helvacıya, olmadı.
Küfecilik ettin, kıvıramadın,
incittin belini.

Silemezsin ne yapsan hayalinden
Hacı Bekirin helvasını
ve Halep kebabını Rasim ustanın..

Ne yatak bilirsin, ne yorgan,
ne ayağın çorap görür, ne sırtın ceket…
Sünnetini bile unutmuştur Kızılay.
Belki karakol dolabından gayrı
bir çatı altına da sokamadın başını..
Bilmem, neden ısınamadın şu bekçilere,
haksız mıdır, kendi mahalleleri dışına,
seni sürerlerse?
Onlar da karışmazsa sana
unutursun neyin nesi olduğunu.
Bugün okunmazsa esamin
onun da zamanı gelecek,
adın nüfus kütüğüne geçmeli,
yol parası çıkacak yakında
yaşın gelince asker olacaksın!

Bir şikâyetin yok şimdilik,
havalar ayaz gidiyor, o kadar..
Gündüzleri Aksaray'da göründüğün olur,
manavların önünde.
Eğer yerindeyse keyfin
sinema resimlerine dalarsın akşamları.

Açıldığın da olur Beyoğluna doğru,
bir tramvay basamağında.
Efkârlandığın günler
sözde şarkı satarsın mahalle arasında,
Uyan Sunam'ı söylersin
Apartımanlara karşı

Şu kuyruksuz da olmasa
çekerdin acısını yalnızlığın,
İyi köpektir,
bir yediğiniz ayrı gider,
o da bilir senin kadar
peşine düşecek çöp arabasını.

≪お前は自由！≫
お前に口出しする者はなく、会おうという者もない、
何を先生から叱られるというのだ
努力しなかったからといって、
お前の食べたパンで
恩をきせる者がいるだろうか。

お前がどんな仕事に鼻を突っ込もうと
うまくいかなかった、
なんと難しいことか　パンの金を捻出することは！
マージュン屋でタンバリンを打った　日雇いで
それらにはすぐに飽きてしまって、
ヘルヴァ屋には人寄せの歌を歌ったが、だめだった、
かご持ちをやったが、これもうまくいかず、
お前は腰を痛めた。

何をしようとも頭から消し去ることはできない
ハジュ・ベケルのヘルヴァを
それにラスィムさんのハレップケバブを‥

お前は寝床を知らない、毛布も、
お前の足は靴下なんて見たことないし、背中はジャケットを知らない…

お前の割礼すらクズライは忘れてしまったらしい。
たぶん駐在所以外に
屋根の下に入ったことは一度もなかった‥
私は知らない、何故お前が慣れっこにならなかったのか　その見廻り人達に、
道理に合ってないか？自分の管轄街区の外へ
彼らがお前を追放したとて？
彼らでもお前に干渉しなければ
お前は忘れるだろう　自分が一体何であるのかを。
今日お前に価値が無くても
そのときも来よう、
お前の名は人の数に登録されねばならない、
路銀はまもなく出るだろう
その年になればお前も兵士になるのだから！

何の不満もない 今は、
空気は乾いて冷たく過ぎていく それだけだ....
日中はアクサライでよくお前を見かけた、
八百屋の前で。
もしお前の調子が良く順調であれば
夕方 映画のポスターを見て うっとりと物思いにふけるのだろう
ベイオウルに乗り込むこともあった、
路面電車の階段のところにしがみついて。
お前の憂鬱な日々
歌らしきものを お前はなりきって歌う 街区の間で、
ウヤン・スナムの歌をお前は歌う
並び立つアパートに向かって。

その尻尾のない犬でも道連れにいなければ
お前は孤独に苛まれたろう
いい犬だ
ただ同じ釜の飯をという訳ではないが
そいつも知っている お前と同じくらい
かぎまわるべきゴミ収集車については

≪*SÜNNET DÜĞÜNÜ*≫
Sayfiyeye çıkmasak da

bize göredir bu aylar…
Tahtakurusuna aldırmayız,
kulak asmayız sivrisineğe,
kim gözünü açacak yorgunluktan!

Evlerimiz gibi şenliklidir mahallemiz de…
Konu komşu toplanır,
taze asma yaprağından zeytin yağlı dolmayla karşılarız
Hıdırellezi…
Biliriz açmasını
kesenin ağzını yerine göre,
hesapla kitapla işimiz yok.

Nasıl olsa kurtulmuyor
iki ayağımız bir pabuçtan
Yorgana göre uzatmaktan ayağımızı
kötürüm olmak işten değil.

Doğrusu ya eğlencesiz yapamayız,
mahalleye cümbüş mü lâzım,
Uzun Ahmedin kızı
bir nişan daha yapmazsa bu günlerde
Ağustosa sünnet düğünü yapar
çoluk çocuk eğleniriz.
Bizim emektar seccadeye olur
ne olursa…

Eşi dostu toplarız bir gece,
Nuhtan kalma lüküs lâmbasını
asarız karaduduna Dülgerlerin.
Bir tarafta çocukların tahta karyolası,
donatılmış masalar bir tarafta…
Armağanlar gelir eşten dosttan,
bırakılır yastıkların altına.
Ne şeker doyurur bizimkinin gözünü,
ne de işlemeli mendiller,

gönlü kızı gibi bir bisiklettedir.

Vakti gelince meydan açılır；
kıvraktır oyunu kızlarımızın,
tüy gibidir vücutları..
Berber Kâzım kanun çalar,
Çarşambalı Yusuf keman,
Safiye'yi çağıracak değiliz ya
Tapu kâtibi dururken!
Her şeyi yerli yerinde bizim oğlanın
eğer bir sünnetse noksanı,
o da çıkıversin aradan!

≪割礼祝い≫
我々が夏の家に出かけないとしても
それもまた我々には合っている この季節...
南京虫など放っておいて、
蚊に注意を払いもしない
誰がその目をわざわざ開くものか こんなに疲れて！

我々の家のように 街区も活気に溢れている...
近隣住民は集い、
新鮮な葡萄の葉でできたオリーブ油のドルマと共に迎える
我らが息子フドゥルエレズを...
我々は知っている
巾着の財布の口を 然るべき時には開くことを
算段なんて我々には無縁だ。

どうあっても免れることはない
二本の足が一足の靴に押し込められたような苦しみからは
毛布の大きさに足の伸ばし具合を合わせることで
かたわになるのは仕方のないこと。

実際のところ 楽しみなしでは我々はやってゆけない
街には娯楽が必要ではないか
ウズン アフメットの娘が

近日中にもう一度婚約をしなければ
八月には割礼祝いをやろう
老いも若いも楽しもう。
我々の使い古されたカーペットに迷惑がられるだけだ
何かそそうがあったとしても...

伴侶 友人をある晩集め
ノアの時代からあるようなパラフィンランプを
ドゥルゲルさんちの黒いクワの木に吊る下げよう
一方には子供達の板の寝床、
準備万端整えられたテーブルはもう一方に...
皆からのお祝い品が来て
枕の下にそっと置かれる。
だがこの子の目は 甘いものでは満足しないし、
刺繍のハンカチも用はない、
心から望むのは 女の子の様に 自転車なのだ。

時間になれば広場は開放される；
娘達は踊りくねり、
その軽やかさは羽毛のようだ。
床屋のキャーズムはカヌーンを鳴らし、
チャルシャンバル・ユースフはケマンを弾く、
サーフィイェを呼ぶことがあるか
住民課の役人が来ているんだから！
我らの息子には何でも揃っている
もし足りないものが割礼ならば、
それもついでにやろうじゃないか！

≪*VAPUR İSKELESİNDE*≫
-Eğer ev tutacaksan,
suyu içinde olsun
ev sahibi dışında,
zehir eder insana lokmasını…
Sokakta kalmak istersen
kız da yüzüne karşı çek kapıyı
şimdiden hazırdır kiracılar.

-Yığın yığın insan taşısın
trenler, Boğaziçi vapurları
biz bu pazarı da öldürelim
vapur iskelesinde…

Farkında değiliz mevsimin,
ne yazlık gömlek var arkamızda,
ne modaya uygun bir ceket ;
pabuçlar kıştan kalma,
üstümüzdekiler geçen yazdan.

-Açık kalmasın da sırtımız
giyinmek bizim için değil…
Bütün zorumuz boğazdan,
hasretiz bol sirkeli salataya
henüz girmedi mutfağımızdan içeri
Ayşekadın…
Dilimiz bağlı geçiyoruz
manavların önünden
ne karpuzun turfandası bizim
ne üzümün.

-Hadi senin başında çoluk çocuk
ben kimin için katlanıyorum
basık evlerin küf kokusuna
ve pisliğine bekâr odalarının?
Bütün kış,
sabah uykusunun
ve bir bardak ıhlamurun hasreti çekilir.
Bizim gayretimiz getirir de yazı
tadını başkaları çıkarır…
Kimin için bırakırız sıcak yatağı
fabrika düdüklerinden önce,
bu kör boğaz için değil mi bütün çilemiz!

-İşte Ada vapuru kalkıyor,
dolaş candan bir tanıdık bulabilir misin
dert yanacak,
Çımacıdan, ateşçiden gayrı…
Bakır yüzlü kadınların arasında
bizim Cibali kızlarını göremezsin.
Rastlayamazsın,
Unkapanı köprüsünde karşılaştığın,
göz kapaklarındaki uykuyu,
avuçlarıyla dağıtan işçilere…
Ve sigaranı destursuz yaktığın
Defterdarlı arkadaşlara…

≪船着場にて≫
－もし家を借りるつもりなら
水道が中についているものを
そして家主は外に、
奴は人を居たたまれなくするだろうから…
路上生活がしたければ
怒れ　奴の顔めがけてドアを閉めれば済むことだ
すでに準備ができている　次の住人は。

－山のような群集を運ぶがいい
電車や、ボアズィチを往来する船よ
俺達はこの日曜も無駄に過ごそう
船着場で…

俺達は気づかない　季節なんて、
夏物のシャツがあるか　俺達の背に、
今はやりのジャケットも；
靴は冬からずっと同じものだし、
着ているものは去年の夏からだ。

－開けておくな　俺達の背中を
着る服に悩むのは俺達には向いてない…
俺達のあらゆる苦しみはこの喉のせいだ、

山盛りのすっぱいサラダを恋しがる
まだ我々の厨房には入ってきていない
アイシェカドゥン豆は…
口を結んで通り過ぎる
八百屋の前を
温室のスイカは俺達には手の届かないもの
ブドウだって。

－ほら　お前には面倒見るべき子供達がいる
だが俺は誰のために耐えているのだ
屋根の低い家のかび臭さや
独身者の汚らしい部屋に？
毎年冬、
朝寝と
一杯のぼだい樹茶を切望する
俺達の努力が次の夏をもたらすにしても
うまい汁はほかの人々が吸い尽くす…
誰のために俺達は暖かな寝床を後にする
工場が動き出す前から、
この見境の無い喉のためではないか、すべての苦しみは！

－ほら　島を往来する船が出る、
歩き回って　気の置けない仲間を見つけられるか
心を開いて話せる友を、
索持ちや火夫達以外に…
褐色の顔色をした女達の中に
故郷の農村ヂバリの娘達を見ることはできない。
出くわさないだろう、
ウンカパヌ橋でお前が出会ったような、
目蓋に張り付いた眠気を、
手のひらで払い落とす労働者達には…
またタバコに無断で火をつけた
役所勤めの友にも…

≪*NE DİYEBİLİRSİN!*≫

Geç vakit işten çıkarsın,
iki satır konuşmak için
hasretsin bir ahbap yüzüne,
bıçak açmaz dostların ağzını
değirmenci su derdinde…

Yorgunluğu çıkarmak istersin
bir koltuk meyhanesinde,
kesen elvermez,
ne yaparsın, gün o gün değil…

Bir kahveye sokarsın başını,
dolaşamazsın ya böyle soğukta..
Temiz bir kahve çeker canın,
mis gibi nohut gelir burnuna,
sen eski tiryaki, gel de iç bakalım!

Duramazsın okumadan yeni haberleri,
gazeteler emeklilerin elinde…
Vakit gelir radyo açılır,
dinle dinleyebilirsen!
Erkek müşteriler uğrar meyhane dönüşü,
bir sözle kestirip ajansı
plâkla Urfa havası çaldırır,
ne diyebilirsin,
paraya geçer hükmün!
Girecek değilsin ya belâya
tutarsın erkenden evin yolunu；
hem altıda kalkacak adamın
işi ne, kahve köşelerinde!

≪お前に何が言える！≫
夜遅くに仕事を終え、
ほんの二言程度の会話のために
恋しくなる　一人の友人の顔が、
ナイフでもこじ開けることはできない　友人達の口は

水車番の関心が水であるように…

疲れを癒したいのだろう
ある落ち着いた居酒屋で、
だが金は払えない、
何ができると言うのだ、今日はその日じゃないのだから...

とあるコーヒー屋に頭をくぐらせる、
歩けないだろう　こんな寒空で..
純粋なコーヒーがお前の気を引くだろう、
葉巻の芳醇な香りがお前の鼻に漂う、
お前は元中毒患者、さあ　吸ってみろ　ほら！

新しい新聞を読みたくてしかたがないのだろう、
新聞は老人達の手の中だ...
時間になってラジオがかかる、
聞け　聞けるものなら！
男客たちがやってきた　飲んだ帰りに、
一言でその番組を消してしまい
レコードでウルファの音楽をかける、
お前に何が言える、
力は金と結びつくのだ！
ごたごたに首を突っ込むような奴じゃないだろう
お前は早くに家路につく；
また六時には起きねばならない男は
何の用があったのだ、コーヒー屋で！

≪*SAYFİYE*≫

Üçü de düştü cemrelerin,
hükmünü gösterdi üç dokuzlar,
yüz tuttu havalar ısınmaya.
Tam kendini dinleyecek zamanın,
ne başının üstünde dönen kayışlar kaldı
ne kulağında çarkların uğultusu…

Ver, cami duvarına arkanı,

kesik bacağını altına kıvır,
kestir sinekler bastırmadan!
Serili dursun önünde mendilin,
toplanır yarım kalıp sabun parası
temizlersin bütün bir kışın kirini
ve pisliğini yangın yerinin…

Gene senin bileceğin iş,
dermansız çıkmışsın kıştan
temizlik ne zaman olsa olur,
boğazına ver kazandığını,
bak, bir türlü ısınmıyor sırtın!
Seni canından bıktırsa da bu kaşıntı
dişini biraz daha sıkıver,
sular da ısınır yakında,

beklemezsin herkes gibi
denize düşmesini karpuz kabuğunun,
atar koltuk değneğini bir kenara
dalarsın soyunmadan.
Gecelerin kırıldı ayazı
bu mevsimi olsun Boğaz'da geçir
bırak artık şu Aksarayı,
zaten taşındı adalara
ileri gelenleri mahallenin
kalmadı işe yarar çöp tenekesi…

≪夏の家≫
三つのジェムレ*も落ちた、
三回の九日間**がその力を発揮して、
少しずつ凍てついた空気を和らげる。
一休みするその時、
頭の上で回る歯車もなければ
耳に響く機械の騒音もない…

もたれろ、モスクの壁に、

失った足の下に垂れる余ったズボンをくくり、
蝿の群れがやってくる前にうたた寝でもしておけ！
自分の前にハンカチを広げておけば、
集まるだろう　石鹸半かけ分の金が
洗い落とすのだ　丸々一年分の垢を
それからお前が寝起きする火事跡の汚れを…

もちろんお前次第だが、
お前はひどくくたびれて冬を終えたようだ
洗濯はいつでもできる、
稼いだものは喉に与えよ、
ほら、ちっとも温まらないでいる　お前の背中は！
このかゆみがお前を死ぬほど苦しめるのだとしても
もう少し歯を食いしばれ、
水も温まる　まもなく、
待ちきれないのだろう　皆のようには
スイカの皮が海に漂う季節までは、
松葉杖を浜辺に投げ捨て
お前は飛び込む　服のまま。
ここのところ夜の冷え込みも和らいだ
この季節が良かろう　ボスポラスで過ごせ
もはやアクサライは用済みだ、
既に島の夏の家へ引っ越してしまった
町の金持ち連中は
残らなかった　食い物をあされるごみ箱は…

*冬の間にジェムレは 3 回落ちて、全部落ちれば春になるという古い迷信。
**ジェムレとジェムレの間には 9 日間のインターバルがある。

≪*ŞUBEYE DOĞRU*≫
Bir bakraç su dökülür peşinden
ve Islak gözlerle baka kalırlar,
annenle, kız kardeşin…
Komşu çocukları,
nöbetle taşırlar torbanı
şubeye kadar.

Köşeyi dönerken
son defa çevirir de başını
büyüdüğün sokağa bakarsın,
Surdibi'ndeki teneke yüzlü evin
her zamandan fazla hüzünlüdür.

Girince kahveden içeri,
seni bekleyen arkadaşlar
atarlar kaptıkaçtı kâğıtlarını
masanın üstüne…
Son kahveni içersin ocaktan!
Kahveci her zamandan daha soğuk
seni uğurlar.
Sonra Mustafa'ya uğrarsınız
yemekler hazır değildir henüz.
Meze olur, haftalık çiğer tavası
suyu tazelenmiş şaraba.
Son meteliğe kadar
kusur etmez ikramda arkadaşlar…
Helallaşıp ayrılırken, Mustafa
bilmem hangi pazardan bakiye
128 kuruş zimmet gösterir
borcunu Nuri alır üzerine..

Fatih durağında, bir ara,
kenara çeker Osman'ı, konuşursunuz,
" Hele sen bir kere dön " der arkadaşın,
" o mesele kolay! "
Ve sonra emanet edersin
anneni, kardeşini
en yaşlısına arkadaşların…
Yazdırmasını söylersin onları
Beşiktaş'ta tütün deposuna.
Çatalhan'a doğru yürürsünüz,
birer birer dolaşırsın odaları

ustanı bulur,
çift başına çalıştığın sıralarda,
kalan sekiz liranı istersin：
“ Sen merak etme ” der “ annene yollarım.
Şimdi biraz dardayım da. ”

Girince öğleye doğru
yabancı şubesinden içeri,
birdenbire ayarsın.
Veda edersin dostlarına,
sivil elbiselere…
Dökülür biraz sonra önüne
henüz rengi koyulaşmayan
kıvır kıvır sarı saçların
ve sevkiyatta geçer ilk gecen, uykusuz..

≪駐屯地に向けて≫
一杯の水瓶で水がまかれる　出立するお前の後ろから*
そして潤んだ目で見つめて立っている、
お前の母親と、妹は…
近所の子供達は、
取り合いながら運んでいく　お前の背嚢を
駐屯地まで。

角を曲がるとき
最後に振り向く、
お前が育った通りを見る、
スルディビにあるブリキのお前の家は
いつもよりあまりにも沈鬱な表情だ

コーヒー屋に入ると、
お前を待つ友人達は
小型バスのチケットを投げる
机の上に…
最後のコーヒーをお前は飲む　かまどから！
コーヒー屋の主人はいつもよりずっと冷淡に

お前を送り出すだろう。
それからお前達はムスタファのところに立ち寄るが
食事は準備されていない　未だに。
肴になる、週代わりのレバーのフライは
新鮮になったワインと一緒に食べれば。
最後の一銭まで出し尽くし
失敗はしない　もてなしにおいて　お前の友人達は…
お互いを許し合い別れる時、ムスタファは
どの取引の残りか知らないが
128 クルシュの請求をつきつける
お前の借金はヌーリが肩代わりするだろう‥

ファティフのバス停で、少しの間、
オスマンをそっと呼び出し、お前達は話すだろう、
“ まあお前　また帰って来てからだ ” と友は言う、
“ 借金のことは大した問題ではないから！ ”
そしてその後お前は委ねる
母親と、妹を
仲間の中の最年長者に…
彼に書かせるように言う　家族が就職するための願書は
ベシックタシュのタバコ倉庫に。
チャタルハーンまでお前達は歩く
お前はひとつひとつ部屋をまわる
親方を見つけ、
二人で働いた期間の、
残りの 8 リラを貰おうとする：
“ 心配するな ” と親方は言うだろう “ お袋さんに送っておくよ。
今は自分も少し苦しいから‥ ”

昼までに
見知らぬ駐屯地の中に入るや、
突如お前は目が覚めるだろう。
別れを告げる　友達に、
一般市民の服装に…
暫くして目の前に散りまかれる
まだ染めたての

カールしたお前の黄色い髪
そして輸送車の中で最初の夜は過ぎて行く、眠れずに‥

*伝統として、無事に戻ってくるよう旅立つ人の後ろから水をまく風習があった。

≪ALTIN BİLEZİK≫
Sen de sırayı savdın,
çıktı askerlik aradan
komşular kapı kapı kız peşinde,
sen kendi derdindesin.
Değil mi ki boştasın,
kaç para eder hünerin dikişlide,
bıçağının sayada hafifliği!..

Hamlaşmasaydı bileklerin,
elin mantarlıya yakın olsaydı,
çabuk geçerdin tezgâhın başına
nankörlük etmez işçisine Çatalhan；
şu var ki erken başladı kar kesadı,
durgun alışverişler.
Şimdilik babadan kalma
son tencere de çıksın bakırcılara,
lüzumu yok sana kabın kacağın；
ilerde yeniden düzersin takımı
iğneden ipliğe kadar.

İşten erken çıktığın akşamlar
uzanırsın Yeniyol'dan Acıçeşme'ye
bahardır önümüz；
gözünün tuttuğunu seçersin.
Bir günde söz kesilir,
yüzükler takılır hafta sonunda,
Yenikapı'da şarkı dinlenir
ve ilk hediyeni
kendi elinle çekersin kalıba；
budur gördüğü göreceği!

Hele bunlar ilerde düşünülür…
Paslanmadan elde altın bilezik
münasip bir iş bul kendine；
hiç olmazsa yanında çalış
bizim eskici Halildin,
pençe de mi gelmez elinden?

≪金のブレスレット≫
お前も役目を終えた、
解放された　兵役の期間から
近所の人々はお前に合った娘をあちこちで探している
お前は自分の問題で手一杯だ。
違うか　仕事がないだろう、
いくらになるというんだ　お前の裁縫の技術は、
靴を作る時の見事なナイフさばきは…

お前の腕が落ちてなかったら、
その手が流行のコルク靴作りに長けていたならば、
職を得るのはすぐだったろう
労働者を悪いようにはしない　チャタルハーンは
だが早くも訪れた雪のせいで商売は上がったり
買い物客は減ってしまった。
今や父親の形見の
最後のシチュー鍋も質に出される　金物屋に、
必要はない　お前には　台所用品なんて；
その内再び揃えるだろう　一揃い
何から何まで。

仕事が早く引けた夜には
遠出する　イェニヨルからアジュチェシュメまで、
春はもう目の前だ；
お前は気に入った者を選ぶ。
ある日結婚を決意して、
週末には指輪をはめる、
イェニカプでは歌が聞こえる

そして最初の贈り物を
自分の手で型をとる；
これが　最初で最後の贈り物だ!

まあ　これらはいつか考えられるだろう…
その手を飾る腕前がさびついてしまわない内に
自分に適した仕事を見つけよ；
どうしてもだめなら彼の所で働け
近所の中古屋のハリットと、
できるだろう　擦り減った靴底に金具を当てるくらい?

≪*KARA DAYIYA MEKTUP*≫
Gidenler gelenlerden
yolladığımız selâmlar da olmasa
çoktan yitirirdik izimizi.
Ne yapalım, düşmüşüz kendi derdimize,
zor geliyor iki satır karalamak…

İyiceymiş sağlığın
kelle kulak gelmiş yerine,
aranızda pehlivan geçinen Asım'ı
bir tutuşta yere çalmışsın
kır gezintisinde…
Bilmem sende mi, Asım'da mı keramet!
Yalnız, medreseden kalma
romatizmaların tutuyormuş ara sıra…

Ben de fena değilim,
iştahım yerinde,
yalnız kaşıntı var vücudumda biraz
uyuz diyenler de oldu,
fayda vermedi ne yaptımsa,
halden anlar bir doktora gittik
meğer kanımız bozulmuş, bayat gıdadan…
Evet kanımız bozulmuş!
Günlük palamutların bile

denize döküldüğü bu memlekette
bozuk yiyecek mi kalır!
Ne yaparsın,
kaşınmanın da bir tadı var kendine göre…
Bu tat yüzünden
uykumu kaçırdığım da oluyor.

Bir gece çıkayım dedim Karagümrük'e doğru
senin cami avlusundan geçiyordum
ortalığı bir görme,
yedisinden tut yetmişine kadar
iç içe geçmiş…
Nerde dedim, gelsin görsün
serçenin yuvasını düşünen şair!

Beni görünce,
çektiler çullarını başlarına
korkudan…
Bilmem memur mu sandılar!
Bir ihtiyara yanaştım
çekinerek selâmımı aldı,
iki lâf ettik :
Çınar dibindeki, hamalmış
gümrük önünde,
işi işmiş ama önceden
atılmış şimdi çürüklüğe…
Satılmayan gazetelerini
başının altına koymuş bir çocuk
kıvrılmış duvar dibine,
onun yanı başında
birbirine sarılmışlar sıkı sıkı
yeni evliler.
Karşıda bir emeklinin karısı
durmadan sigara içiyordu.

Eli ayağı düzgün

bir kızı da varmış ama
misafirmiş arakadaşında ;
hiç olmazsa
rahat bir döşekte geçecek gecesi.
Bir tarafı medrese duvarına dayalı
çerden çöpten bir kulübe vardı
ve içinde oturduğu yerde uyuyan
yaşlı bir kadın.
Kocasını iki gün önce götürmüşler
vurgunculuk suçundan!

Senin Rıza da özeniyordu bu işlere,
işkembecide gördüm geçen gün
işe girmiş,
imtihanları kaçırmış bu yüzden ;
tüyü düzmüş baştan ayağa…
İlk günlerde
müdüründen lâf işitmiş,
kılık kıyafet yüzünden…
Kışa çok var diye
çıkarmış elinden pardösüyü
birkaç kuruş eklemiş de üstüne
bir takım elbise uydurmuş.

Senin anlayacağın
heybeyi bozup torba yapmış!
Belki de hoş görünmek içindir
dairesindeki kızlara…
Benim içim geçmiş de Karadayım
bu işlere aklım ermiyor…

Biz boğaz derdine düştük
unuttuk çoktan üstümüzü başımızı…
Böyle olduğu halde işler
Çemberlitaş'taki köfteciyi bıraktık da
işkembeciye düştük.

Hem unuttuk şarabın çeşnesini,
varsın fezlekeye geçsin sarhoşluğum
ihtar gelsin yukardan,
aziz dostum, bununla beraber
geceli gündüzlü ayık geziyorum!

≪カラダユ*への手紙≫
人づてに
送り合う挨拶でもなければ
とっくに分からなくなっていた　お互いの消息は。
どうにもしようがない、手一杯になってしまった　自分達の苦しみで、
難しくなっている　たった二行書くのも…

まあ　そっちも元気らしい
頭も耳もしかるべき場所についているし、
お前達の間で大将で通っていたアスムを
お前は一掴みで地面に叩きつけたらしい
田舎道で…
私は知らない　お前にあったのか　それともアスムか　勝敗の秘訣は！
ただ、メドレセ時代からの
リューマチに苦しんでいるようだね　時々…

私も悪くはない、
食欲も尋常だし、
ただかゆみがある　体に少し
かいせんだと言う者もいた、
効果は無かった　何をしても、
状況の分かる医者に行った
どうやら我々の血が病気らしい、腐った食べ物のせいで…
そう　血が汚いんだそうだ！
毎日カツオですら
海に撒かれるこの国で
悪くなったものを食べているなんて！
どうしようというのだ、
かゆみも楽しいものだよ　それ自体が…
この楽しみのおかげで

眠れないこともあるくらいだ。

ある晩出かけてくると私は言った　カラギュムリュックまで
お前がよく行くモスクの中庭を通っていた
周囲を見まわすと、
家を持たない人々が皆
所狭しと集まっていた
どこにいる、来て見るがいい　この様を
スズメの巣について思いをはせる詩人は！

私を見るや、
彼らは頭にほっかむりをした
恐怖から…
役人とでも思ったのだろうか！
ひとりの老人に近づいてみた
ためらいがちに私の挨拶に応えた、
二言ほど話した：
プラタナスの木の下にいるのは荷物持ちらしい
関所の前の
稼ぎは良かったらしい　昔の話だが
今や不具者に数えられてしまった…
売れ残った新聞を
頭の下に敷いた子供は
丸くなっていた　壁の下で、
そのすぐ側で
お互いに抱き合っていた　固く固く
新婚の夫婦は。
向かいにはある退職者の妻が
ひっきりなしにタバコを吸っていた。
手も足もちゃんと付いている
娘もひとりいるらしいが
友達の所に遊びに行ったらしい；
少なくとも
心地よいベッドで過ごすだろう　その晩は。
一方でメドレセの壁に支えられた
ありあわせのもので作られた東屋があった

そして中には座ったまま眠る
年老いた女性。
彼女の夫は二日前に連行されたらしい
ペテンの容疑で！

お前の友人のルザーも羨んでいた　こんな仕事を、
彼を先日イシュケムベ屋**で見かけた
そこで働き始めたようだ
試験は落としたらしい　このせいで；
身なりを整えた　上から下まで…
はじめの頃
マネージャーから叱られたらしい、
外見のせいで…
冬までまだ間があると言って
手放したんだそうだ　薄いコートを
何クルシュかそれに足して
服を一式揃えた。

察しはつくと思う
彼は肩下げかばんを潰して手提げを作ったのだそうだ！
おそらく良く見られたいがためだろう
同じ階の娘達に…
カラダユ、私はすっかりくたびれてしまって
この類の話にはもう頭がついていかない…

私達は生活の苦しみに没頭している
とっくに忘れてしまった　身なりのことなど
ものごとこんな調子にもかかわらず
チェムベルリタシュにあるキョフテ屋は諦めて
イシュケムベ屋に甘んじている。
実際忘れた　ワインの味も、
酔ってしまいたい　警察に事情聴取されたいものだ
警告も来るがいい　御上から、
愛する友よ、この事実と共に
夜も昼も私は素面で歩いているのだよ！

*農村で、人々から慕われる頼り甲斐のある男性につけられるニックネーム
**牛の臓器などの料理を出す店

≪*ÇAY*≫
Parlak geçti…Star Kulüp'te,
doğum günün için verdiğin çay
bu şeker kıtlığında.
İçkilere yapılan zamlardan habersiz
zengin bir büfe çıkardın doslarına.
Davetliler seçmeydi, caz mükemmel,
Adalılar son vapuru kaçırdı,
sabahladı Boğazdakiler,
hatırın için；
içtiler, eğlendiler şerefine.
Halledilmedik mesele kalmadı
sabaha kadar.

Sen buldun arasını,
geçen sene bir açık artırmada
birbirine yüklenen iki dostunun
Nişanına sen karar verdin
İsviçre'den dönen Enver'le
teyzenin kızı Neclâ'nın,
haftaya aynı kulüpte.
Ne kadar paralı olsa da
Enver'den iyisini mi bulacak,
dansta var mı üstüne çocuğun?

Bu gece karar verildi nakline
Necmi'nin ardiyesindeki çimentonun
Nişantaşı'na.
Bitecek apartımanın üç dairesi
üç aziz dostuna kiralandı şimdiden.
Ofislere yeni memurlar atandı,
tecziyesi düşünüldü bir kâtibin.
İçtiği şaraptan mı nedir,

iç salondaki poker partisinde
fazlaca girdi içeriye
Balıkpazarı'nın Konyalısı.

Yarın beklenebilir,
iki kuruş daha fırlaması pirincin
nakil masrafları yüzünden.

Yine fazla taşkındı Nihatçığımız
pervaneydi etrafında
içince tutamez kendini,
ne de olsa hoş çocuktur,
hiç de yabana atılmazdı takside,
parmağına geçirdiği yüzük.

Eh, iyi bir gece geçirdiniz,
ağır tuvaletler vadı,
çok beğenildi saçların
Sanmam ki giydiğin hoşa gitmiş olsun,
öğrendiler diktiğini Cemal'in
bırak şunu, eski kredisi mi kaldı,
işitiyoruz neler diktiğini
taşralı zenginlere!

≪饗宴≫
輝かしく過ぎた…スタークラブで
誕生日にお前が開いたパーティーは
この砂糖も不足するご時世*に
酒の値が高騰していることなど知らず
ご馳走を振舞った　友人達に。
客は選り抜き、ジャズは完璧、
島から来た者たちは船の最終便をやり過ごし
朝を迎えた　ボスポラスの住人は、
お前に敬意を表して；

酒を飲み、楽しんだ　お前のために
未解決の問題は無くなっていた
朝までには。

お前は仲を取り持ってやった、
去年とあるオークションで
仲たがいした二人の友を
婚約をお前が取り付けてやった
スイスから戻るエンヴェルと
叔母の娘ネジュラーに、
来週は同じクラブで婚約パーティーだ。
どんなに金を持っていても
エンヴェル以上の男は見つからないだろう、
ダンスにおいて彼以上の男がいるか？

今夜交渉成立した
ネジュミーの倉庫にあるセメントを
ニシャンタシュまで運ぶことについて。
そうすれば完成するだろう　アパートの３世帯分は
三人の大事な友人に賃貸することになった　早くも。
事務所には新しい職員が配属され、
ある職員にはペナルティーが考えられた。
ワインを飲んだせいだろうか、
奥のサロンでのポーカーのパーティーで
負けがこんでいた
バルックパザルのコンヤ者は。

明日にはおそらく
米は２クルシュ値上がりするだろう
輸送費のせいで。

やはりはしゃぎ過ぎだった　我らのニハット坊やは
うろちょろとまとわりついていた
飲めば止まらない、
だがそれでも良い青年だ、
やはり見逃せない　タクシーで、

彼が彼女の指にはめた指輪のことは。

ああ、お前達は良い一晩を過ごした、
豪奢なイブニングドレスが行き来した、
とても好まれた　お前の髪型は
但しお前の格好は好まれたとは思えないが、
彼らは知った　それを縫ったのがジェマルであることを
いいかげんにしておけ、そんな昔の恩など、
我々は聞いている　彼が何を縫ったのかを
いなか大臣の金持ち連中のために！

*この詩は第二次大戦中に書かれた。

≪*AKŞAMÜSTÜ*≫
Eve dönünce kahveden,
geçirip arkana beli kuşaklı entarini.
kurulursun köşe minderine.
Sedirin dibinde bekler
mercan terliklerin.

Vurunca ellerini birbirine
okkalı fincanla gelir kahven；
yudum yudum sindirirsin içine.
Kül tabağında yasemin çubuğun,
burnunun ucunda gözlük,
elinde Tasviri Efkâr,
seyredersin ahval-i âlemi
mirsadı ibretten：

İlk işin
Kaça yükseldiğini öğrenmek olur,
altunun!

Sonra sokarsın burnunu
Velid Hoca’nın başmakalesine.
Süzerken ajansları,

yarı uyur, yarı uyanık,
yükselir ezan sesi
Hırkayı Şerif'ten…
Geçirirken ayağına terliklerini
köküne kibrit suyu,
kırsın birbirini dersin,
küffârı hâkisâr!
Ellerini tekrar vurunca,
ibrikte gelir abdest suyun.
Namaz sonunda
yalnız sizin işleriniz için,
her yerde hâzır ve nâzır
ve her müşkülü âsan eden o Zülcelâl'e,
hamdü senâda bulunursun.

Sabahları Berlin'den
Kudüs Müftüsü'nü dinlediğin radyonun
sıyırıp mavi boncuklu yeşil kılıfını
Kahire'yi bulursun.

Kulağında Arap'ın Yusuf sûresi.
Rastan,
elinde tesbih…
Bir yanda kırılır Kenan diyarı
kıtlıktan,
Bir yanda buğday dolu ambarları Mısır'ın
Canlanır gözlerinde,
Züleyha'nın hüsnü ânı,
kendinden geçersin.

Duvardaki guguklu saat,
bölünce hülyanı ortasından,
uzun uzun gerinir
sofraya inersin,
rızıklanırsın Allah ne verdiyse..
Kerime cariyemiz

Bu akşam da Park Otel’dedir,
Ve mahdum kölemiz telefon etmiştir
Ada’dan…

　≪アクシャムウストゥ*≫
コーヒー屋から家に戻ると、
腰ベルト付きの長衣をはおり
隅っこのマットレスにお前は落ち着く。
ソファの下で待っている
お前の珊瑚色のスリッパ。

手をたたけば
お前のコーヒーが大きめのカップで出てくる；
ちびちびと味わいながら飲むのだ。
灰皿にはジャスミンの小枝、
鼻の上には眼鏡を引っ掛け、
その手にタスヴィリ・エフキャール紙を、
お前は眺める　世界の情勢を
怒りや喜びを覚えながら：

最初の仕事は
いくらになったかチェックすること、
為替が！

それから没頭する
ヴェリッド先生の社説に。
ニュースをじっくり読むときに、
うつらうつらとしているのだが、
聞こえてくる　エザンの声が
フルカユ・シェリフ**から…
スリッパを履きながら
無くなってしまえ、
お互いに殺し合うがいい、とお前はつぶやく、
不信心者の国など！
手をもう一度たたくと、
水差しに入って出てくる　清めの水。

礼拝の終わりに
ただ自分達の仕事のためだけに、
あらゆる所にいらっしゃり
あらゆる困難からお救いくださるあの偉大な神に、
お前は感謝の祈りをささげている。

毎朝ベルリン製の
イェルサレムの宗教指導者の声を聞くラジオの
青いボンジュックのついた緑色のカバーをとって
カイロのチャンネルに合わせる。

耳に響くアラビア語のユスフの章。
ラスからの、
手には数珠…
一方でカナンの地では
物不足が蔓延している、
一方エジプトの倉庫は小麦でいっぱい
だがお前の目に浮かぶのは、
スレイハ***のしなやかな美しさ、
そうして思いに耽っている。

壁の鳩時計が、
お前を現実に呼び戻すと、
大きく伸びをして
お前は食卓へ降りていく、
食事をとる　アッラーがお前に適当だとして恵んだものを…
娘は
今夜もパーク・ホテルにいる、
そして息子は電話をかけた
島から…

*オスマン朝時代に大臣や高官が着た二重のそで付きの毛皮コート
**ムハンマドが着たとされる長衣。トプカプ宮殿に安置されていて、その部屋の呼び名でもある。
***ユスフに恋したポティファルの妻。

≪NE YAPMALI?≫

Maaşı yüksek, çıkarı yolunda,
uygun bir işi bulup kendine
vazgeçver şu hocalıktan.
Arzuhalcilik etsen Divanyolu'nda
Tapuda, nüfusta iş kovalasan
çıkarırsın aldığın maaşı…
Kahrını neye çekmeli bu mesleğin,
cahil mi kalırmış çekilirsen
memleketin çocukları?
Beş on paran olsa elinde
sen bilirdin yapılacak işi,
Karaköy kahvelerini dolaşırdın
kulak verir masalara,
öğrenirdin piyasanın iç yüzünü.

Zaten bu devirde,
ne atarsan bir kenara
gün geçtikçe koymakta üstüne ;
çok kazanmak için
sürecek malı bilmeli.
Eğer biçimine getirirsen
girersin açık artırmalara,
büyüklerden tanıdıkların var,
bilirsin yerinde lâf etmesini,
yırtıksın!

Henüz sana istifçilik gelmez,
doğru değil parayı bağlamak,
sürümden kazanmalısın.
Simsarlık da temiz iş doğrusu
yazıhane açar Sirkeci'de,
yaldızlı bir kart bastırır
Kayseri'ye haber salarsın,
alır pastırma işlerini üzerine,
mal gönderirsin karaborsadan
oralı değil misin!

Biraz kalınlaşınca
bir apartıman dikersin Beyoğlu’na
“ Emek Apartımanı ”
Kiraları yüksek diye
kim açabilir ağzını,
sen temeli 39 dan sonra attın.

Sonra genişletirsin yazıhaneyi
bir iki kâtip çalıştırır,
bir de muhasip tutarsın..
Biri esmer biri sarışın
iki daktilo alırsın yanına
Yalova’da geçirir yazları
kışın Uludağ’a çıkarsın,
sen de bilirsin para yemesini
alın teriyle kazandıktan sonra.

≪何をすべきか？≫
給料は良い、まあ順調だ、
自分に合った仕事を見つけて
やめてしまえ　そんな教職など。
ディヴァンヨルで嘆願書を出せば
居住課や住民課で仕事探しのために手を打てば
得られるだろう　それまでと同じくらいの給料を…
このしんどい仕事にどうして耐える必要がある、
お前がこの仕事から手を引けば　無学になるというのか
この国の子供達が？
手元に５パラ*か１０パラあれば
分かっていた　なされるべきことは、
カラキョイのコーヒー屋をうろついて
テーブルに耳を傾けて、
お前は学ぶだろう　為替の動向を。

つまりはこのご時世に、
小金を貯金しておけば

日が経つにつれ額は増えていくのだ；
たくさん稼ぐためには
必要な資金も知っておくべきだ。
もし成功すれば
公開オークションにも入れるし、
お偉方ともお知り合いになれよう、
話をすべき場も分かる、
お前はとてもやり手だ！

お前はがめつくなるにはまだ早い、
金を貯め込むべきではない、
商いで身を立てるべきだ。
仲買業もきれいな仕事だ　実際
スィルケジで会社を起こし、
金メッキの名刺を作り、
カイセリへも手を伸ばす、
パストゥルマ**生産に乗り出して
製品を送り出す　闇市から
だってそこの出身だろう、お前は！

少し肥えてきたら
ベイオウルにアパートをひとつ建てるだろう
“エメッキ・アパート”だ
家賃が高いといって
誰が申し立てできるものか
お前は土台を大戦勃発の’３９年以降に作り始めたのだから。

それから会社の規模を拡大する
書記のひとりふたりは働いている、
また会計士もひとり雇うだろう‥
黒髪とブロンドの
二人のタイピストを側に置く
ヤロヴァの海辺で夏を過ごし
冬はウルダーにスキーに行く、
お前も知るだろう　賄賂をうけるということを
額に汗して稼いだ後で。

*パラ＝40 分の 1 クルシュ
**香辛料を使った塩漬けの干し肉。カイセリの名産品。

≪*ÇİLOĞLAN*≫

Kim dinler Akyazıda Topal Ömeri,
kırkın çıkmadan unutuldu
kulağına ezanla söyledibi isim,
sen köyün taktığına bak：
Çiloğlan!

Ne geldiyse başına ezanla geldi,
babanı sabah ezanı çıkardılar yola,
ananı öğle namazına yetiştirdiler
mescit önüne…
Kendi kendine büyüdün bir ahlat gibi,
fazla konuşmazdın,
Akyazı'nın sığırından gayrı
kulak asan yoktu sözüne.

Köyün hatırı sayılanları
ne düşündülerse düşündüler,
başgöz ettiler Kumköylü Hanife'yi,
yatsıdan sonra girdin gerdeğe.

Yar mı olur elin yosması sığırtmaca,
çok sürmeden arası
“ Hanifeyi samanlıkta bastılar ”
Bu iş ezan vakti olmasa da
başının altından çıktı imamın.
Çok geçmeden yayıldı türküsü：
“ şalvarını gül dalına astılar. ”
Keyfini eller sürsün yosmanın
tasası Çiloğlana
Bu olsun, beş ölçek arpayla
senin de payına düşen…
O başını aldı gitti şehire

sen Hanife’nin türküsünü değil,
Yine kendi türkünü söyle：
“ İndim dere beklerim
Vay benim emeklerim! ”

≪チローラン*≫
誰が聞くだろう　アクヤズ村で　びっこのオメルの言うことなど、
お前が生まれて４０日経たない内に忘れ去られた
その耳にエザンと一緒に囁かれた名前は、
お前、村人がつけた名を見てみろ；
チローラン！

その身に災難が降りかかるときはいつもエザンがついてまわった、
父親を朝のエザンがあの世に送り、
母親を昼のエザンが埋葬のため連れていった
メスジットの前に…
自力で大きくなった　雑草のように、
余計に口は開かなかった、
アクヤズ村の牛の他
お前の言葉に耳を傾けるものはない。

村の御仁達は
何を考えたにせよそれは絶対で、
結婚させた　クムキョイ村のハニフェを、
夕方の礼拝の後　お前は初夜を迎えた。

恋人になれるものか　よそのあばずれは　羊飼いにとって
そう間もない内に
“ 納屋でハニフェの不貞が暴かれた ”
この事件はエザンの時刻ではなかったが
不貞の相手はイマームだった。
すぐにこんな囃子歌が広まった：
“ 彼女のもんぺは　バラの小枝に　かけられる。”
あばずれのおいしいところは他の男に
悩みの種はチローランに
こんなものだ、結納にたかだか５オルチェッキ**の大麦で

お前の取り分になるものは…
彼女は荷物をまとめて行ってしまった　町へ
お前はハニフェの歌ではなく、
今度は自分の歌を歌え：
“ 谷におりて　川辺で呆けよう
なんてこった　俺の努力は水の泡！“

*そばかすだらけの青年。
**１オルチェッキは４オッカ（１オッカ＝１２８３ｇ）

≪*KÖPRÜ*≫
Senin Sürmeneli dediğin
burnunun dibinde dururken İstanbul,
el tarlasında fındık dibi mi çapalar
çevirir de arkasını Karadeniz’e!
Ne güne duruyor Hüdaverdi’si Zeynel’in,
üstündeki üstünde
başındaki başında,
muşambaya sarılı nüfus cüzdanın,
limandan mühürlü gemici kâğıdın koynunda,
yoldasın!

Dökmezse marifetini ortaya
babanı Çaltı’da kapaklayan karayel,
eğer Kerempe göstermezse hünerini,
uzanır başüstüne şakalaşırsın
iyi gün dostu yunuslarla…

Uyarsa havası, haftaya,
Bababurnu, Kefken adası,
derken Büyükdere’desin.
Köprü’yü çakırkeyf yürürsün o akşam；
bir ara korkuluklara yaslanır
düşünürsün nasıl geçtiğini Haliç’e
çift direkli gemilerin.

Sen de öğrenirsin aslanım,
gizli kapaklı taraflarını…
Belki de ikinci seferinde, kaptanla,
hır çıkınca aranızda pay yüzünden
sen de öğrenirsin içyüzünü Köprü'nün!

≪ハリチ橋*≫
お前がスルメネ者と呼ぶ者は
すぐ鼻の先にイスタンブルがあるというに、
他人の畑で雇われてヘーゼルナッツの木のたもとで耕していることはない
黒海に背を向けよ！
ゼイネルの息子ヒュダヴェルディは黒海に留まることはない、
服もあるし
体も丈夫だ、
リノリウムにくるんだ身分証明と、
港の承認印付きの船乗り証を懐に、
出発だ！

その自慢の威力を見せ付けたりしなければ
父をチャルトゥで挫かせた北西風が、
またもし岬がその力を発揮したりしなければ、
お前は舳先へ出て行って戯れるだろう
問題ない日の友のイルカ達と…

天候が回復すれば、来週には、
ババブルヌ、ケフケン島を通って、
やがてビュユックデレに着くだろう。
ハリチ橋を上機嫌に歩くだろう　その晩は；
しばし手すりにもたれ
考える　どうやってハリチ橋をやり過ごすのか
二本柱の大きな船は。

お前も知るだろう、
内緒の隠された一面を…
おそらく 2 度目の航海で、船長と、
取り分のせいで不和が生じれば

また知るだろう　ハリチ橋が跳ね橋であることも！

*ガラタ橋のこと。

≪*HALIL DAYI*≫

Harman veresiye oturduğun köy kahvesi
Halil Dayısız kaldı.
Ne vardı, çifti çubuğu bırakıp yüzüstü
feleğe kahredecek?
Anlardın bu toprağın dilinden,
sen çıkarmayınca sabanı
çifte başlanmazdı bu köyde.
Kurttan kuştan öğrenirdin
kaçı olduğunu Kasımın.
Bilirdin gözün kapalı,
hangi harmandan geldiğini
avuçlarındaki buğdayın.
Senin bahçıvanlık neyine,

işin ne, bu Çiftehavuzlarda?
Ne çıkar kaçırdı ise kızını
Hacı Durmuş'un oğlu；
tapusu onların üstünde
Harmantepe'nin.
Davarlarının beyazı ayrı yayılır
karası ayrı…

Kendine dert etmezdin ya,
kızın beşik kertmesi sözlü olmasaydı
emmi oğluna.
Yüz bırakmadı elin uğursuzu,
adam içine çıkacak.
Rençber olduğun halde doğma büyüme
yarıya çalıştığın toprak
seni doyurmaz olmuştu,
bırak, hozan kalsın tarlalar!

Şimdi bir bakıma işin iş,
kurak da gitse havalar, yağışlı da gitse,
yine üç öğün yemeğin hazır.
Toprak yine o toprak ama
şu dört duvar düşündürür adamı.

Çıksan da nereye gideceksin?
Şöyle bir Beyoğlu'na uzansan,
yaşın kıvamını bulmuş,
eski tadı yok Şehzadebaşı'nın,
gönül şen olmazsa para mı eder?
Kim bırakır, çıkmak istesen de,
Bey'in bugünlerde misafiri fazla
manavı, kasabı senin üzerinde.
Sen izinli çıkarsan
en seçme çiçeklerle kim donatacak
eriklerin dibindeki masaları?
Onlar içer eğlenirken
bir köşeden çalgı dinlersin
senin de gözün gönlün açılır.
İşte herkes kendi âleminde
rahatsın ya, fazla karıştırmaya gelmez,
bu değirmen dönüyor ya
sorma nerden geldiğini suyunun!

≪ハリルおじさん≫
収穫でツケを払う約束で座っていた村のコーヒー屋に
ハリルおじさんの姿が見えなかった。
何があった、畑仕事を中途で放り出して
世を儚むような出来事が？
お前は知っていた　この土の扱い方を、
お前が鋤を持ち出さねば
農作業は始まらない　この村で。
狼から鳥から　何だって知っていた
１１月の何日かだって。

えり分けることができた　目を閉じていても
どの収穫のものかを、
手の上の小麦が。
何で庭師などしているんだ？

何の用がある　このチフテハヴズラルで？
問題あるか　娘がとられたとて
ハジュ・ドゥルムシュの息子に；
彼らが持っているのだ
ハルマンテペの権利書は。
家畜も白いのはこちらで草を食む
黒いのはあちらで…

自分を苦しめることにはならなかっただろう、
娘が幼い頃から
叔父の息子と許婚でなかったら。
体面を保てなかった　よその非情者のせいで
男は家に引きこもるだろう
農村で生まれ育ったのに
半端にしてしまった土は
もはやお前を養えない、
捨ててしまえ、畑は荒地のままで良かろう！

今ある意味お前の仕事は上々だ、
空気が乾燥しようが、雨が降ろうが、
それでも三食の食事は用意される。
土はやはりあの土だが
その四面の壁は考えさせる　男に。

出かけるにしてもどこへ行く？
ちょっとベイオウルに出向くにしても、
年齢的な限界を知る、
昔の面白みはない　シェフザーデバシュには、
心が弾んでいなければ　価値がないではないか？
使い走りにするだろう、お前が出かけたがっているのなら、
主人は最近客が多すぎて忙しい

八百屋も、肉屋もお前が行くのだ。
お前が許可を貰って出かけてしまったら
選び抜かれた花で誰が飾る
プラムの下のテーブルを？
奴らは酒をたしなむ　楽しむときには
街角から楽の音が聞こえるだろう
お前の目も心も開かれている。
大体誰もが自分のことにかまけていて
落ち着くだろう、余計な干渉はない、
この水車は回っているだろうが
聞くな　その水がどこから流れてくるのか！

≪*BESLEME*≫
Daha kapının önünde
neyin varsa çıkardılar sırtından,
kökünden kazıdılar saçlarını
Fatma girdin, evin hamamına
Bahtiyar çıktın.
Yatmadı dilin kolay kolay.
ikide bir “ efendim! ” demesine.
Zor geldi, karşılarında dikilmek,
yürümek, istedikleri gibi.

Sağdı Beyefendi o günlerde,
yatağa yeni düşmüştü；
iki yıl sen temizledin altını
ördeğini sen döktün.
İyi adammış gitti zamanında
ne çekti, ne çektirdi.

Daha ertesi gün,
yatağın altındaki çekmecenin,
düğümlendi anahtarı
Hanımının ipek mendiline.
Sokak üstüne taşındı pirinç karyola,
sen alt kata indin.

Huyların bozulmasın diye,
ne alış verişe çıkarıldın
ne de gönderildin mektebe.
Üzerinde kaldı mutfak işleri,
bulaşığına kadar.

Vücut sağ olunca,
iş midir, muşambaları silmek,
Hanımının dizlerini sıvazlamak,
çıkıp üstüne
kulunçlarını ezmek akşamları?

En hoşuna giden şey
taşımaktı, siyah kılıflı şemsiyesini
üç adım gerisinden.
Bakarak kalın kürküne
ve hantal bacaklarındaki çizmelere,
yol boyunca düşünürdün
soğukluğunu bu memreketin.

Gel zaman, git zaman,
uzadı beline kadar saçların
yanakların kızardı,
Hanımın eskileri yakıştı boyuna
gelinlik kız oluverdin.
Tahsildarın annesi oldu
ilk dünürlüğe gelen；
yüz bulamadı…
Bir emekliydi ikinci talibin,
mutlaka duymuş olacak
oturaktaki hünerlerini…
Yirmibeşe yükselince yaşın
çıktı karşına Siirtli mahalle bekçisi,
aracı koymadan；
küplere bindi Hanımın.

Evde kalacak değilsin ya
gidersin bir münasibine, vaktin gelince.
Şekerci Sokağı'ndaki cumbalı ev
nikâhta senin üzerinedir,
dayarsın, döşersin istediğin gibi
ne güne duruyor halılar, yüklükte?
Daha parmak kadar çocuksun,
ev işlerinde gerisin biraz,
noksanın var kolada, ütüde.

Şimdilik bir sözünü iki etme Hanımın,
ayrılma dizinin dibinden,
otur kızım otur,
bahtın açılsın!

≪居候の娘≫

まだ扉をくぐってないというに
彼らはお前のぼろを剥ぎ取った
丸坊主にした　お前の髪を、
ファトマ、お前は家の風呂に入った
出てくる頃にはバフティヤフルという名がついていた。
お前の言葉遣いはうまくいかなかった　そう簡単には。
常々「ございます。」を付け加えることに。
難しかった、彼らに対して平静を保つことは、
彼らの望むとおりに歩くことも。

主人は元気だった　当時は、
床に伏せるようになってまだ間もない頃で。
二年間お前は下の世話をした
水差しで水も注いでやった。
良い人だったようだが　寿命で逝ってしまった
愚痴もこぼさず、小言も言わず。

また次の日に
ベッドの下の引出しの、

鍵は結ばれた
夫人の絹のハンカチに。
合金のベッドは路上に運び出され
お前は下の階に下りた。
お前が悪い習慣に染まらぬようにと、
買い物にも出されなければ
学校にも行かされなかった。
台所仕事はお前の役割だった、
洗い物まで。

体が丈夫なら、
大した労働ではないだろう、リノリウムの床を拭くのは、
夫人の膝をたたいてやるのも、
夜な夜な背中に乗って踏んでやるのも？

お前が一番好きな仕事は
持ち人だった、黒い袋のついた傘を
三歩後ろからかざすこと。
分厚い毛皮のコートや
おぼつかない足取りのブーツを見ながら、
道中考えていたものだ
この国の寒さについて。

時は過ぎ去り、
腰まで伸びた　お前の髪は
頬は赤みを帯び、
夫人のお下がりは丈にぴったりで
お前は年頃の娘になった。
徴税人の母親がなった
最初の結婚申込人に；
だが娘の顔を見ることはできなかった…
退職者だった　二人目の求婚者は、
当然聞いたことになるだろう
家でのお前の特技の数々…
２５歳にまで年を重ねて
目の前に現れた　シールトリ町の巡査が、

仲介を置かずに；
夫人の逆鱗に触れた。

行かず後家になるつもりはないだろうに
お前に合ったところに行くだろう、時が来れば。
シェケルジ通りにある張り出し窓の付いた家は
結婚すればお前のものだ、
家具を揃えるだろう、お前の望みどおりに
何の必要がある、食器棚にこの絨毯は？
まだお前は何の力もない子供だ、
家事に戻る　もう少し、
足りないのだ　勇気も、強い意志も。

今は夫人の言葉ひとつに反抗するな、
その膝元を離れるな、
座れ　娘よ　座れ
その名の如く　お前に幸運（バフット）あれ！

≪*TOSYA ZELZELESİ*≫

I

Bu akşam başı dumanlı Ilgaz'ın
Devres'in üstünde bulutlar,
havada yağmur ağırlığı…
Kepenkler erken indirildi,
Hanönünden dağıldı memurlar
kısa kesti paydos düdüğünü
çeltik fabrikası…
Sustu dokuma tezgâhları
durdu iki bin mekik,
ikibin dokumacı vardı uykuya.
Dayanarak köprünün korkuluğuna
Bekçi Ali hırsız kolluyor.
Kıvrıldılar birer köşeye
Şerif'in kahvesinde köylüler
torbaları başlarının altında..
Gâvur Ali'nin hanında yolcular

kestiler öksürüğü…
Postacının atları huysuzlanıyor
kişniyor pazarcının beygiri
hancı uykuda, yolcu uykuda…
Yarın erken kalkmayı düşünmiyenler
Yirmibir oynuyor geç vakit
Şehir Kulübü'nde!

II

Ateşler kül bağladı sobalarda,
Tosya kanuykulardadır..
Dilküşa Mahallesi'nde bir cam kızardı
bir anne çocuğunu emziriyor…
Bağ yolunda hastane'nin
sızıyor ikinci katından ışıklar.
Yok hastaların bir şikâyeti.
Yalnız Çaybaşından Hasan'ın
tuttu çeltik tarlasından kalma
Musibet romatizması…
Çekildi odasına yorgun hemşireler…
Şimdi koridorları dolaşmada
adımları gecebekçisinin…

III

Saat biri otuz beş geçiyor…
Köpekler silkindi uykundan…
Değişti bir anda manzara,
canlı cansız devrildi ne varsa ayakta
yok oldu insan emeği…
Döküldü sokaklara insanlar
ölüler kaldı yerinde…
Vakitsiz giden hastalarına
üzülecek hemşireler kalmadı…
Sağ kalan çocuklarımız bir daha
karşısına cıkmıyacaktır Kâzımın.
Çocuğunu emziren kadının

Soğudu memesinde sütü…
Kimler dönecek köyüne,
hana sağ inenlerden；
yolcular yataklarında gömülü
atlar ahırda ölüdür.
Bozuldu tezgâhlar,
mekik tutan eller kırıldı；
Yarın Çeltik fabrikası
işbaşı çalamaz；
artık uyandıramaz çalsa da
yedi yüz Tosyalıyı uykudan!

IV
Dudaklarında ne anne, ne kardeş adı
yağan yağmura aldırmadan mahpuslar,
eğilerek duvarlar üstüne
insan arıyorlar, kurtaracak!..

V
Sabah geç oldu…
Kara haber salındı Ilgaz'a
yayıldı dört yanına memleketin.

VI
Hanönü'nde kuruldu çadırlar…
Kazanlar kaynıyor herkes için
Köprübaşı'nda.
Bir felâket havasında kaynaşanlara
kamyonlar ekmek taşıyor uzaktan!
Merhabası olmayanlar
aynı çadırda geçirdiler ilk geceyi.
Açıldı evlerin içyüzü
ne var, ne yok döküldü ortaya…
Çok geçmeden arası
pazar kuruldu Çayboyu'nda,
açıldı dükkânlar,

geçti herkes kendi yerine…
Beş gündür aç, susuz
bir duvar altında kalan tiftik işçisi
yine çuvalların başındadır,
kızmıyor geç kurtarıldığına.
Yaver yine pirinçlerini taşıyor
Kalfaoğulları'nın.
O çoktan unutmuştur, üç gündür
beklediğini enkaz altında
ama ara sıra hatırlayacaktır,
gündeliğini verenlerle
aynı kazandan yediğini…
Herkes yine işinde gücünde,
herkes yine kendi yerindedir.

≪トスヤ地震≫

Ⅰ

今夜　ウルガズの頭はぼけている
デブレスの上には雲、
空気には雨の重み…
シャッターは早くも下ろされ、
ハノニュから家路についた　役人達は
省略した　休止のサイレンを
精米工場は…
沈黙した　機織り機は
停止した　二千個の機織りの梭
二千人の機織工が眠りについた。
橋の手すりにもたれながら
巡査のアリは泥棒を見張っている。
寄り固まる　隅っこに
シェリフのコーヒー屋で村人達は
背負い袋を頭の下に敷いて‥
ギャーブル・アリの宿では旅人達が
咳をこらえた…
郵便屋の馬は　落ち着きがなく、
いなないている　売り子の馬は

宿屋は眠り　旅人も眠り…
明日早く起きる必要のない連中は
ブラックジャックを楽しんでいる　遅くまで
町のクラブで！

Ⅱ
火は灰に埋もれた　ストーブで、
トスヤは何も知らず眠っている‥
ディルキュシャ街でひとつの窓ガラスが赤く照らされた
母親がひとり子供に乳を与えている…
病院の中庭の小道に
二階から明かりが洩れている。
病人達に不満はない。
ただチャイバシュ出身のハサンの
畑での農作業が原因の
ひどいリューマチが痛み始めたくらいだ
くたびれた看護婦達は自分たちの部屋に引きこもった
今は廊下を歩く
夜警の足音…

Ⅲ
夜一時を三十五分過ぎた…
犬達が眠りからはね起きた…
変わってしまった　一瞬の内に風景が
生き物無機物一変した　立っているものは何もかも
無に帰した　人の努力…
道路に人々は溢れ出した
死んだ者は残った　その場に…
死ぬには早すぎる病人達を
心配するはずの看護婦達は残らなかった…
無事に残った子供達は　しかし再び
キャーズム先生の向かいに出ることはなくなった。
子供に乳を与えていた女性の
乳首の母乳は冷たくなった…
誰が戻るだろう　自分の村に、
宿に無事に泊まっていた者達から；

旅人達は寝床に埋まり
馬達は納屋で死に絶えた。
壊れてしまった　機織り機は、
梭をつかむ腕は折れた；
明日精米工場は
始業のサイレンを鳴らせない；
もはや起こすことはできない　鳴らしたとしても
七百人のトスヤの人々を眠りから！

Ⅳ
彼らの唇に母親の名も、兄弟の名も浮かぶことなく
降りしきる雨に注意することなく囚人達は、
壁の上に体を折り曲げて
探している、救い出してくれる者を！‥

Ⅴ
朝は遅かった…
惨事の知らせがウルガズのところに飛び込んだ
ニュースは国の四方に広がった。

Ⅵ
ハノニュでテントが建てられた…
大鍋が火にかけられた　皆のために
キョプリュバシュで。
不運な天災で団結した者達へ
トラックはパンを運んでくる　遠くから！
普段は挨拶も交わさない人々が
同じテントで過ごした　最初の夜を。
開放された　家々の内情が
有るもの何でも人々の前に積み上げられた…
間もなくして
市が立てられた　チャイボユで、
店も開かれた、
誰もが自分の場所に戻っていった…
五日間食料も水も無かった
ある壁の下に閉じ込められたモヘア工場の労働者は

再び刈り取った毛を入れるための袋を持って働いている、
怒っていない　救出が遅れたことに。
ヤーヴェルはやはり運んでいる
カルファオウルラルの米を
彼はとっくに忘れていたらしい、三日間
瓦礫の下で待ったことを
だが時々思い出すだろう、
日給をくれる人々と
同じ大鍋から飯を食ったことを…
誰もが再び仕事に場所に、
誰もが再びいるべき場所にいる。

（Ⅱ）“ *SINIF* ”に対する裁判所側の見解

以上が *SINIF* の全容である。この作品は、これまでにも述べた通りトルコ刑法 142 条に反するとして起訴されたのだが、では起訴した裁判所側の見解を、1944 年 8 月 10 日に行われた裁判の報告書から見ていくことにしたい。(29)

(…)

裁判所によって専門家として選ばれた専門家の報告書では；

『*SINIF*』という本の著者が病的精神の持ち主であること、コミュニズムの為のプロパガンダという性質でなく、価値ある文学でもないことを説明し宣言しているようである；

犯罪の主題である『*SINIF*』という詩集の調査においては：

１－*ÇOCUKLARIM* という題の詩において：

教育を受ける時代の子供たちが貧しく空腹であること、生活の糧を得る為に外で働いていて学校に来られない、しかしながらこの飢えた子供達は満足していて、自分達ではなく他人に同情して無償で手助けするほどに利他主義な人々であるという意味に取れ、また一方で“ 中央アジアについて話したものだ 言葉足らずながら ”と述べる形で民族主義に当てつけたこと；

２－*REMZİ* という題の作品では：

ある貧しい生徒の惨めな状態を叙述していて、“ 何のためにこれを恥じる、我々が恥じ入るべきなんだ ”と言って我々の社会に言及したこと、子供は授業を知らず、しかしあらゆるものの相場や闇市について知っていてこれが彼自身には十分であると言っている（“ お前が知らなかった人称代名詞なんかどうでもいいんだ ”）即ち我々の社会の内面を暗に非難していること。

３－*SINIF* という題の作品において：

ある裕福な子供の教室におけるずうずうしさ、傲慢さについて述べていて、この子供の、評判によればいい人である父親が国の重要な人々のみを厚くもてなしたことを、またその息子が誰にとっ

ても邪魔者であり、自分の富についての話を他の子供たちに無理矢理聞かせたことを；さらに農園で雇われた者の息子である“勇敢なハリル”という生徒がこの御曹司のどうしようもない悪態を堪え、またやはりこの貧しい子供ハリルが徴税人の為に市場で塩を売り卵を集めることを述べて、裕福な者が老いも若いも自己中心的であり、貧乏人を悪く扱う非情で傲慢な人々であることを、貧乏人はといえば裕福な者達の支配に屈し彼らの為に働く従順で我慢強く利他主義な人々であることを強調している。また（“玉ねぎ一つを道連れに鉄板で焼いたトウモロコシのパンで食べた”）の部分で何の必然性も無いのにコミュニストに独特の（yoldaş；同士）という言葉を用いて裕福な者達を間接的に非難したことと、同時にこの作品において学校の教室について説明しつつ金持ちと貧乏人の間の矛盾と関係を指摘する形で人々、集団もしくは階級にまで言及したこと；

４－*HÜRSÜN* という題の作品で：

ある孤児を取り上げ、その青年時代までを（お前の割礼すらクズライは忘れてしまったらしい）述べることで我々の社会がこの子供の利益に何の干渉も援助もしなかったことを、ただこの孤児が見られた為に見回りに追われ駐在所に放り込まれたことを、彼が外で愛情も一つの屋根も見出せなかったことを述べながら、しかし“まもなく路銀は出るだろう、その年になれば兵役に行かねばならないのだから”と言うことで社会と国家が貧民に対し搾取者もしくは植民地主義者の立場にあると示したこと；

５－*SÜNNET　DÜĞÜNÜ* という題の作品では

自分自身のような貧民達の娯楽のスタイルを、風刺したこと；

６－*VAPUR İSKELESİNDE*

家主が借家人の気分を害し、反抗的な借家人を路上に放り出すということ、金を持つ人々が市場をうろついて楽しむ一方で貧民達は彼らを船着き場で眺めて休暇を費やすこと、“我々の努力が夏をもたらすとしても、上手い汁は他人が吸ってしまう。－島を往来する船をうろついてみろ、索持ちや火夫達以外に気の置けない仲間を見つけられるか、褐色の顔色をした女達の中でヂバ育ちの女工を、書記の友を見ることは出来ないだろう”と述べることで人々の裕福な者と貧民という二つの集団の間にあるもの、即ち豊かな人々が圧迫者、搾取者、富と楽しみの中で健康な人々であることを、貧身や労働者が互いに心からつながっていて、我慢強く、勤勉で、リラックスや娯楽から切り離された人々であると指摘したこと；

７－*NE DİYEBİLİRSİN* という題の作品では：

貧しいある労働者が夜仕事を終えた後の生活を説明している、夜遅く誰もが生活に追われて駆けずり回るため会話をする友人の一人も見つけられない、金も無い為居酒屋へも行けないでいる。コーヒー屋で純粋なコーヒーが見つからない為に飲めず、新聞は読みたいし、酔っ払いは邪魔をするし、金が無いので何一つとして上手く行かない。要するに、ある貧しい労働者が大概あらゆることから除外されその生活が制限されていて、皆の圧迫に耐えざるを得ないと指摘していること；

８－*SAYFİYE* という題の作品では：

足を片方失った貧しい一人の労働者がアクサライの火事の焼け跡で冬を越したことを、

貧困と苦しみの中にあることを、彼が物乞いをしていることやかゆみを取り除く為海に入ること、ボスポラスへ行くことを勧めている。“もはやアクサライは用済みだ、／既に島の夏の家へ引っ越してしまった／町の金持ち連中は／残らなかった　食い物をあされるごみ箱は” このかたわの貧民が街に住む金持ち達のゴミ箱を諦めたことを、さらにこの金持ち達が島へ夏の休暇を過ごしに行く為にこの貧民達の生活が妨害されていると説明していることから、これによって金持ち達がそのゴミの缶でさえも貧民達を満たすほどに裕福であること、この浪費好きな金持ちがこのムダをゴミ箱に捨てず貧民に与えるということを考えないほどエゴイストであり、非情で卑劣な人々であることを示そうとしていること。

９－*SÜBEYE DOĞRU* という題の作品では；

ある労働者の兵役への出立を叙述している。ここで特に次の人々を観察している。コーヒー屋は彼をいつもより冷淡に見送り、食堂のムスタファは最後に用意した 128 クルシュの返済を迫る。これを彼の友人が肩代わりし、彼は靴屋の主人のところに立ち寄り、彼が受け取るはずの 8 リラを請求するが、主人は渡さない。その後、お前の母親に送る、と言って給料を引き伸ばしにしている。駐屯地に行き、髪を切り最初の晩を輸送車の中で眠れずに過ごしている：

これより、兵役に行く労働者が単に自分の仲間にしか助けてもらえなかったことを、既に彼が利用できなくなると見るや、コーヒー屋は彼を冷淡に送り出したこと、食堂の主人は彼の身包み剥がす為に借用書を捏造したこと、彼が主人から受け取るはずの僅かな賃金も得られなかったことを、要するに自営業クラスでさえ労働者を最も悲惨な時にも搾取しようとしていることを（兵士になる者達の家族への政府によってなされる援助に気づかなく見えるよう）言っている。

１０－*ALTIN BİLECİK* という題の作品では：

兵役から戻った靴屋の労働者が仕事を見つけられなかったことを描写している：なぜなら（兵役の為長い期間制作作業が出来なかった為）技術が衰え、一方で流行も変わり、収入低下があったからである。最終的に中古屋の Halit のところで働く他どうしようもなくなったこと：

これからも前の作品とまとめてみると、兵役に行く時と同様帰って来てからも労働者達に誰も気をとめないことを、そしてただ自分のような人々の手助けだけを期待している。

１１－*KARADAYINA MEKTUP* という題の作品では

モスクの中庭で寝る惨めな人々の生活を描写している：この貧民達は著者を警察官と思って怖がったとのこと。彼らは貧しいある女性の夫をペテンの容疑で連行したらしく、貧しい職員は、服がみすぼらしい為に上司から叱責を受け、主人公も一介の職員なので金欠の為もはや酒を切望しているというのに、上司達はは未だ彼がアル中だと思っているらしい。作品の半ばで空や鳥について詠う詩人達をけなしている。ここから次の様な意図が伺える：（この貧民達は政府から慈悲ではなく恐怖を受けている。不幸なある貧民はペテン師として連行され、上司は身なりの悪い職員に同情すべきものをこの状態の為に侮蔑して

いる…。上に立つ者も下で働く者も彼の空腹状態を知らずに彼を未だ娯楽追求者とみなしている）（このようにして社会を、また明白に政府を侮辱しているように見受けられる）

１２－*ÇA Y*という題の作品で：

ある金持ちの贅沢な饗宴について説明している。この欠乏と高値の時代に行われるにもかかわらずこの面倒と費用が無駄にならないことを、またこの宴のおかげで娘には夫、アパートにはセメントと借家人、男達には仕事が見つけられる。一方でコンヤ出身の客をポーカーで素寒貧にし、しかしこのコンヤ者も損した痛みを次の日米の価格を上げることで人々の良心の呵責を取り除いている、それ以外は金持ち達の無礼と奢りを露わにしている。

１３－*AKSAMÜST* という題の作品で：

信仰心厚い金持ちの夕方の過ごしぶりを描写していて、この金持ちが金袋または貿易で忙しいことを、新聞上の戦争のニュースが人間的感情を満たさないことを、反対にけんかしている無神論者が互いを痛めつけることに満足することを、ただ自分の商売のためだけに神を崇めていることを、エジプト・ラジオを聞くときにカナンの地における貧困とエジプト人の納屋の差異に興味を惹かれることもなくただズレイハのしなやかな美しさを思い浮かべてうっとりすることを（即ちあたかも敬虔なようだが完全に物質主義で欲情に溺れる人間であることを）、さらに敬虔であるこの人物の子供達がまったく近代的であることを、彼の娘がパークホテルで、息子が島で放蕩と浪費の限りを尽くしていることを述べようと意図している。

１４－*NE YAPMALI* という題の作品で：

我国でこの時代に金を手にした貧しい役人があっという間にどのようにして金持ちになりうるか、またどのように生活を過ごしていくのかを叙述している。最終的に（お前も知るだろう　賄賂を受けることを、額に汗して稼いだ後には）という節で金持ちが苦労もなく金を稼いでいると言いたいようである。

１５－*ÇİL OĞLAN* という題の作品で：

これは村の羊飼いの生活を説明している。（“ お前の身に降りかかる災難は　いつでもエザンがついてまわる ”）と言って宗教を非難している。村の重要人物達が他の村の娼婦を利用するため、彼女を連れてきて村のそばかすだらけの青年（Çil oğlan）と結婚させ、最後にはこの青年の不名誉が暴かれるという形でこの貧民の名誉を彼らが弄んだことを強調している。

１６－*KÖPRÜ* という題の作品で：

黒海地方出身のある船乗りの初めてのイスタンブル来訪を叙述している。橋の（つまりイスタンブルの）内情が船長と船乗り（パトロンと労働者）の間の取り分に関するけんかで成り立っていることを強調している：

１７－*HALİL DAYI* という題の作品で：

ある村人が村を離れイスタンブルに出稼ぎに行く情景を述べている。ここで村のある金持ちの息子が Halil 叔父さんの他の者と婚約した娘を奪ったことを “ 名誉を傷つけるこの

出来事に影響された Halil 叔父さんの、他に許婚のいた娘を奪ったことを ”、名誉を傷つけられたこの出来事以来悲しみに明け暮れていた Halil 叔父さんが村から逃げるはめになったことを、イスタンブルで収入の良い仕事についたとしても四面の壁の間で奴隷のように生きたことを、彼が外に出ることは許されなかったことを、即ち、彼の心が活気あるものでなかった為この金持ち宿での楽しみも彼を満足はさせなかったことを指摘している。

１８－*BESLEME* という題の作品で：

ある裕福な家族が居候の娘を目覚めさせないよう初等教育すら受けさせなかったことを、年頃になった時すべての求婚者を断って手放さなかったことを強調している。

１９－*TOSYA　ZELZELESİ* という題の作品で：

ある地震が引き起こしたあらゆる痛々しい出来事を長々と叙述している。より多く村人や労働者について説明している。最終的に：

（Yaver は Kalfaoğulları の米を運んでいる、彼はとっくに忘れていたらしい、三日間瓦礫の下で待ったことを、時々思い出すだろう、日給をくれる人々と同じ大鍋から飯を食ったことを、誰もが再び仕事に、誰もが再びいるべき場所にいるのだ。）

以上のようにある労働者が大災害の一例である地震のあらゆる悲劇をすぐに忘れてしまったことを、しかし、この予期せぬ出来事で唯一忘れなかったことは自分の日給をくれる人々と同じ大鍋から食事した状態であったことを指摘している。

この結論は、この本が書かれることにおける意図と目的を示すという点で非常に重要である。これより労働者の唯一の希望と望みは、パトロンもが自分と同じ立場に陥ること（即ち金持ちもが貧民達くらいに貶められること）であると示すことで成り立っていることが明らかに見受けられるようである。

被告 Rıfat Ilgaz は必要な訴訟での説明における必要な書面の弁護で、この本で左翼思想についての宣伝活動はしなかったことを、自分が現実主義詩人であるため社会の今日の生活からいくつかの部分を忠実に反映させたことを、本に *SINIF* という題をつけたのは、人々や社会的階級ではなく教師であるため学校の教室を意味するためであることを、本の表紙が赤いのも何ら意味は無く目につきやすい宣伝であることを宣言しているが：

この本の１９作から成る様々な題名の作品を一つ一つ吟味すると次のように見受けられる：はじめの３作は学校の子供達とは離れ、他の１６作が学校と生徒とは何の関係も見出せないこと、この作品のどれにおいても主題である貧民か金持ち、または両方が共にひとりあるいは複数の個人が取り沙汰されていること、人々の間の金持ちと貧民の二つの階級もしくは集団について長々と特徴づけや叙述をしていることを；従って著者は本に SINIF という題をつけることで概して金持ちと貧民の二つの階級を意味したことに疑いを残さなかったようなこれらの詩は、全て読まれれば貧民達に関する部分でもっぱら、概して、労働者達の窮乏、貧困が（２語消えている）金持ちによっても社会や政府によっても考慮されず保護もされなかったことを；純真で、わがまま、利他主義で、我慢強く、身を

屈し、耐える、従順なこの労働者達が、対照的な人々、社会、政府から不公正にまた恥ずべき形で搾取を受けていることを強調していることから；金持ちについて述べているところでは、金持ちが概して、何の苦労も無く金を稼ぎ、陰謀者で、暴利をむさぼる、略奪者で、不当、非情な、浪費好きで、エゴイスト、傲慢で、贅沢な、搾取者である人々から成っていることが指摘されていることから、被告の抗議は認容され得ないようである；被告 Rıfat Ilgaz が本でまとめたこれらの作品をまず様々な雑誌や新聞にひとつひとつ掲載したこと、このため自分に問題が立ち返られることの無い状況でこれらが一箇所にまとめられたことに罪状となるべきものはなく、専門家の報告がこれを強調したものであったという形で弁護も：これらの作品のどれひとつも他の雑誌に掲載されるとき現実からひとつの作品としておそらく受け入れられるであろう。もしくは社会の現実がこれより成り立っているとは考えられないためにおそらく弾劾や起訴に直面することはないであろう。しかし一冊の本の内容が徹頭徹尾このような作品でできていれば我国において現実がこうであると見られるのが望ましい意味と意図を自身から示すことは明らかであることから、この本の出版における目的と意図をも作品の最後（*Tosya　zelzelesi*）という作品の次のような最後の９行が：

Yaver はやはり Kalfaoğulıarı の米を運んでいる
彼はとっくに忘れていたらしい、三日間
瓦礫の下で待ったことを
時々思い出すだろう
日給をくれる人々と
同じ大鍋から飯を食ったことを。
誰もが再び仕事に場所に
誰もが再びいるべき場所にいるのだ。

明らかにしていることから、そして災害の一例である自然現象としてのこの地震のあらゆる悲劇をある労働者にすぐに忘れさせ、ただ日給をくれる人々と同じ鍋から食事したことを思い出すこと（誰もが再び仕事に場所に、誰もが再びいるべき場所にいるのだ。）という形で嘆かせること、著者独自の希望と願いが労働者とそのパトロンが同じ境遇に陥るのを見ることにあり、全くわずかの間続いたこの状態が消えてしまい昔の状態が戻ってしまったことに関して嘆き悲しんでいることを強調する他に説明され得ないであろう事から、彼の弁護は認容できるものとは思われない。

そのような状態に関して：件の本はその内容によれば労働者に肯定的で資本主義者や政府に対して否定的であり、トルコ刑法 142 条の記述内容における国家内での社会的一集団である資本主義者を駆逐する目的で書かれたプロパガンダ以外のなにものでもない。この他著者の自己弁護によれば以前から共産主義者として知られる Hasan İzzet Dinamo をメクテプの生徒であった頃からその作品を読むことで知っていたこと、もしくはその作品を好

んでいたこと、さらに自分自身も最近イスタンブルで会っていることをかんがみれば被告が以前から確固とした左翼思想に親しんでいてこの状況が我々の意見を強める要素であることが見受けられる。

専門家の報告によれば：専門家はこの本の著者が病的性質を帯びていることを、作品がどんな文学的価値にも値しないことを報告している。そのような状況で作家達のためではなく、様式と表現の凡庸さという観点から一般民衆のために書かれたと思われる。専門家はこの本についてプロパガンダをしたのではないと指摘したがやはり 142 条の内容に触れるか否かということについては何の調査にもなっていない。しかしずっと前に政府によってこの本の内容は有害と見られ評議会の決定で回収させられたことによれば、政府によってこの本が他の専門機関にも調査されたこと、プロパガンダ的性質が見られたことに疑いは無い。裁判所が依頼した専門家の報告において本来綿密な詳細や議論は提出されなかったことから、我らが裁判所によればこの報告は信憑性が無く、我々の組織が、この平易な表現の本を調査結果において上記の理由で我国における金持ちに否定的でこの集団を駆逐する方向のプロパガンダの目的を持って書かれた見解に大方到達されることより、被告 Rıfat Ilgaz の行動にトルコ刑法 142 条第１節に従い６ヶ月の投獄に…

（以下署名）

以上が判決の全訳である。これに対して、当時の体制の態度に関する Ilgaz の獄中回想記があるので、少し紹介しておこう。[30] 蛇足だが、彼が収容された Tophane Askeri 刑務所では、後に民族主義者行動党のカリスマ的指導者となるトゥラン主義者の Alparslan Türkeş らと同室であったという、奇妙なエピソードがある。一つ目の引用で述べられている将校は彼らのことである。

. . . 同じ規則が施行されている刑務所（*トプハーネ軍刑務所）にいながら、同じ扱いは見られなかった。私には様々な手錠が付いていた。鎖付きのトルコ製手錠、安全バネの付いたドイツ製手錠、移動の時は両手の親指に指輪のようにはめられる手錠もあった。彼ら（*同室の将校二人のこと。軍事演習時に使うベルトを失くしたため規則違反で牢に入れられていた。）には何も付いていなかった。軍事演習で必要なベルトですらもちろんなかった。ただ月給を貰って八月三十日の祝典で昇進するだけなのだ. . .

. . . 私が一番悲しく思った出来事はといえば、彼らが私を鎖につなぐことだった。ご存知の通り、詩人を鎖につないでいるのだ。ドイツに対して開戦した頃だった。政府は結局、おそらくドイツから何か反応があるだろうと準備していたのだ。牢獄の周囲も補強されていた。ある夜半警報が鳴った。機関銃の音が鳴り響いた。兵士達は我々を銃剣で小突きながら中庭に追い出した。決して忘れない、あの殺人者達はどんなに恐怖で震え上がっていたか。人が理想を持たねば動物のようにどんなにか怖がるということを。犬のような恐怖だ。牢獄には Sami という 17 歳のイスタンブル男

子高校最終学年からきた子供がいた。Alpullu で休暇の間働いているときに Nazım Hikmet のある詩をタイプしていたらしい。ある友人がそれを告げ口した（最終的に 1 年間の懲役を宣告された)。少し後かれらは二人づつ私達を並ばせた。牢獄の館長 Yüzbaşı Reşat 氏がピストルを付けてやってきた。'縛り付けろ　指令はある、秩序を乱す者があれば私が縛る'と言った。

少し後にガシャンという音がして鎖が持ってこられた。我々は、一体これは何になるんだろう、と言っている。鎖を伸ばすと右に左に枷がある。彼らは我々の前に 40-50 人をここへ縛り付けた。もっと他の集団もあった。Sami は私のそばにいた、ある者が Sami を押し、彼は一列後ろに下がった。一人の伍長がやって来て Sami と我々二人を左右同じ枷に手首のところでかけた。これについては Yaşadıkça で書いた：

（…）
ある男子高生とお前の手首を縛っている
40 人の囚人が繋がれた鎖は
お前達の唯一の罪は自由人のように話すことだ
本はお前達の罪の道連れ！　（Bu da Bir Özgürlük Şiiri／Yaşadıkça）

（III）*SINIF* が果たした役割についての考察

裁判所側の *SINIF* に関する見解には、行きすぎた誇張は見られないし、ある意味これは間違ってはいない。政治的プロパガンダではなかったにせよ、彼の思想は明らかにマルクス･レーニン的社会主義思想である。しかし、彼がその思想に傾倒した経緯はその社会背景なくしてはあり得ない。第二章で示してきたように、トルコは急激な経済発展の中で表面的な近代化ばかりを追い求め、社会的弱者を見返ることなく資本主義を突き進んできた。地方への啓蒙活動といっても Halkevleri のように強者の自己満足に終わるものであったり、農村師範学校のように即座に潰されてしまったりといった始末である。取り残された弱者は、資本主義的目標に達するための手段を奪われつつ、しかし目標は厳然としてそこにあるといった矛盾が生み出す緊張の中に置かれることとなる。*SINIF* の中の≪お前は自由！≫という詩の中に次のような一節がある；

何をしようとも頭から消し去ることはできない
ハジュ・ベケルのヘルヴァを
それにラスィムさんのハレップケバブを･･

手は出せないが、美味なものを知っている。これは潜在的な緊張のひとつの例に過ぎない。無意識の内に、既に人々の間で目標は課せられてしまっていたのである。この緊張は社会において逸脱行動を生み出す十分な原因となり得る。即ち、非合法な手段をとってでも目標に到達しようという行動や、最初からこの競争社会からリタイヤして薬物やアルコールに依存してしまうなどのドロップ・アウトの態度である。

Ilgaz は当時の社会が内包していた問題にいち早く目を付け、まずそれを社会問題として認めた。そこで彼が社会主義詩人として行ったことは、トルコが突き進む資本主義を皮肉ることで目標の度

合いを低減し、同時に弱者に対して慈愛の眼差しでもって彼らの持つ手段の価値を認めるという形で目標と手段の差異を縮めることであった。従って彼らの中の緊張状態を和らげるといった、潜在的な逸脱予防機能も持っていたように思われる。もちろん、彼自身がこうした意図を持っていたとは言い難いが、結果的に以上のことも彼の評価に加えられて良いのではないかと考える。

彼が当時のトルコにおいて危険視されたのは、彼の作品の思想的メッセージ性の強さと、強力な国民国家を創ろうとしていた体制を見れば理解できる。この章の（II）で引用した裁判所による判決も言い掛かりとは言い難く、どちらかといえば Ilgaz の弁明の方が無理があり、分が悪くさえ見受けられる。しかしこれまで彼の思想的側面から見てきたが、忘れてはならないのが、彼が詩人、あくまで文学者であるという事実である。文学とは何か、社会に対してどういった役割を担うべきものなのか、ということについては、多くの見解があるだろうし、ここでそれについて述べようという訳ではない。ただ Ilgaz について言えるのは、彼が鋭い観察力でもって世の中の隅々まで見渡し、些細なことも見逃さなかったということである。誰も気に留めることのない微小なことに、むしろ隠されたドラマがあるという事実に、読者は驚かされ再認識する。日常風景の描写であればこそ、その中の非日常は身近なものとして受け入れられやすい。彼のリアリティーの追及は単なる写実主義ではなく、再発見をも含むものである。文学に対するこの態度を貫いた結果としての国家体制との衝突であり、この衝突は不可避であったと思われる。

驚きと同調無くして感動はありえないというのが自分の考えであるが故に、Rıfat Ilagaz の文学に対するこの姿勢には大いに賛同したいところである。

＊出典＊

(1) Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)より抜粋

(2) Mehmet Saydur, R.Hoca'nın ılk Şiiri, Kastamonu Gazetesi, 20.12.1991　[但し Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1998)　P22 より再録]

(3) Rıfat Ilgaz, *Sarı Yazma*, P150 (İstanbul：Altın Kitapları, 1976)　[但し Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)　P25 より再録]

(4) Rıfat Ilgaz, *Fedailer Mangası*, (Yay.haz. Öner Yağcı) (İstanbulÇınar Yayınları, 1993)P87-88　[但し Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)　P45 より再録]

(5) Bezirci Asım, *Rıfat Ilgaz*,(İstanbul：Çınar Yayınları1992) P31　[但し Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)　P46 より再録]

(6). Bezirci Asım, *Rıfat Ilgaz*,(İstanbul：Çınar Yayınları1992)、P48　[但し Ahmet Oktay, *CUMHURİYET DÖNEMİ EDEBİYATI* [1923‐50], (Ankara.1993) P841 より再録]

(7) Rıfat Ilgaz, *Sarı Yazma*, P164 (İstanbul：Altın Kitapları, 1976)　[但し Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)　P29 より再録]

(8) Şükran Kurdakul, *RIFAT ILGAZ*, (Çağdaş Türk Edebiyatı／Broy Yayınları,1987)　[但し Rıfat Ilgaz, *SINIF*,
(İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P8 より再録]

(9) Rıfat Ilgaz, Başdan Dergisi, 14.09.1948 [但し Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)　P40-41 より再録]

(10) Rıfat Ilgaz, *Şiire Dair*, (Yürüyüş,9.9.1942), P7-8 [但し Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)　P41 より再録]

(11) Şükran Kurdakul, *RIFAT ILGAZ*, (Çağdaş Türk Edebiyatı／Broy Yayınları,1987)　[但し Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P8 より再録]

(12) Pertev Naili Boratav, *SINIF İÇİN BİR İNCELEME YAZISI*, (Yurt ve Dünya.1944)　[但し Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P29 より再録]

(13) Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)　P36

(14) Ahmet Oktay, *CUMHURİYET DÖNEMİ EDEBİYATI* [1923‐50], (Ankara.1993) P841

(15)Sabahattin Ali, *R.Ilgaz'ın Son Yirmi Yılın Türk Şiir*, (Yurt ve Dünya. Mart.1943)　[但し Ahmet Oktay, *CUMHURİYET DÖNEMİ EDEBİYATI* [1923‐50], (Ankara.1993) P841 より再録]

(16) Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P43

(17) Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P46

(18) Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P53

(19)Rıfat Ilgaz, Bütün Şiirleri,　P48　[但し Ahmet Oktay, *CUMHURİYET DÖNEMİ EDEBİYATI* [1923‐50], (Ankara.1993) P841 より再録]

(20) Pertev Naili Boratav, *SINIF İÇİN BİR İNCELEME YAZISI*, (Yurt ve Dünya.1944)　[但し Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P29 より再録]

(21) Pertev Naili Boratav, *SINIF İÇİN BİR İNCELEME YAZISI*, (Yurt ve Dünya.1944)　[但し Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P29‐30 より再録]

(22)以上、永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛著『中東現代史Ⅰ～トルコ・イラン･アフガニスタン』（山川出版社．1982）P165～168 より抜粋

(23) Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)　P33‐34

(24) 永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛著『中東現代史Ⅰ～トルコ・イラン･アフガニスタン』（山川出版社．1982）P174

(25) 以上、永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛著『中東現代史Ⅰ～トルコ・イラン･アフガニスタン』（山川出版社．1982）P168～175 より抜粋

(26) 永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛著『中東現代史Ⅰ～トルコ・イラン･アフガニスタン』（山川出版社．1982）P183

(27) 以上、永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛著『中東現代史Ⅰ～トルコ・イラン･アフガニスタン』（山川出版社．1982）P178～184

(28) Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P35～94

(29) Dr. Çetin Yetkin, *Siyasal İktidar Sanata Karşı*, (Bilgi Yayınevi,1970)　[但し Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)　P14-23 より全訳]

(30) Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul, Çınar Yayınları, 1998)　P52-53

＊参考文献＊

＜日本語文献＞

・　永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛著『中東現代史Ⅰ～トルコ・イラン･アフガニスタン』（山川出版社. 1982）

＜トルコ語文献＞

・　Rıfat Ilgaz, *SINIF*, (İstanbul：Çınar Yayınları, 1993)

・　Ahmet Oktay, *CUMHURİYET DÖNEMİ EDEBİYATI* [1923‐50], (Ankara.1993)

・　Şükran Kurdakul, *ŞAİRLER VE YAZARLAR SÖZLÜĞÜ*, (İstanbul.1971)

・　Rıfat Ilgaz, *KIRK YIL ÖNCE KIRK YIL SONRA*, (İstanbul.1996)

・　Mehmet Saydur, *BİZ DE YAŞADIK*, (İstanbul.1998)

TÜRK DİLİ VE EDEBİYATI ANSİKLOPEDİSİ, (İstanbul.1981)